# ラプンツェル

澤村多門

## 1　清川邸

“学校帰りに、ワカ女通りの大きな家の二階、見てみて”
　高校に入って友達になった、同中のトモコから古文の授業中にメモが回ってきた。生真面目で潔癖な印象の強い先生が板書しているのを確認してから、届いたメモの続きに、
“なに？ユーレイでもいるの？”、と書き、真面目に授業を受けている隣人経由で、トモコにメモを届けてもらう。
“すごくキレイな男がいつも見てるから”
“マジ？ジャニ系？”
　メモの往復が続いたが、さすがにトモコも隣のあまり仲の良くない女子に気を使ったのか、授業中ということを考えてか、それ以上の返事は返ってこなかった。
　休み時間になって、トモコとトイレに行く。私たちは大抵こうして時間を共有する。
「で、どんな男なの？」
「うーん、ジャニーズとは違うけど、すごく整った、きれいな顔をした人だよ」
　整った顔。こんな田舎で滅多にお目にかかることのない顔。俄然、興味がわいてきた。
「うーん、見てみたい」
「じゃあさ、今日の放課後行ってみない？ツカサは、方角逆だけど」
　二つ返事でオッケーした。ミーハーと言われればそれまでかもしれない。でも、田舎の女子高に通う高校生に出会いなんてないのだ。しかも私の家は駅とは逆の方向にある。なかなか人に会うこともない。これぐらいの好奇心、許されてもいいはずだ。
　私が通う高校、私立若松女子短期大学付属高校は、有名デザイナーがデザインした制服がかわいいことで有名だ。そして、この田舎の通学区において公立高校に通えない、言ってみればおバカな女の子たちが通う、「バカジョ」としても有名である。私は、このセンスのないあだ名をつけた奴の方がバカだと思う。人を知りもしないで馬鹿と呼ぶ人の方が馬鹿なのだ。
　けれども、残念ながら私も例外になることなく、中学の成績は底辺だった。素行は悪くなかったのだけれど、部活や生徒会など、これといって頑張ったこともなかった。中には勉強と部活と両立して、いい高校に推薦で入る人もいた。その人たちが頑張っている時間、私はテレビで音楽番組を見たり、ドラマを見たりしていた。私とその人たちのレベルの差は歴然だ。
　高校生になったからといって、何かが変わったわけでもない。成績もごく平凡。将来のことだって、あまり考えていない。しいて言えば、いい男に巡り合って、結婚して、二人ぐらい子供に恵まれればいい。やりたいことなんてないから、適当にパートでもすればいいかと思っている。
　ただ、いい男に巡り合わないことには始まらない。私が今一番学びたいのは、学校の勉強ではなく、恋愛だ。どうやったら、いい男と付き合えるか、素敵な恋愛ができるか。だから、トモコの言った「ワカ女通りの大きな家に住むいい男」がとても気になった。まだ見たことも、会って話したこともないけれど、事と次第によっては付き合うのもありかと思っている。気が早いかな。
　トモコとは、中学では違うクラスだったのであまり話したことがなかったけれど、入学式のときに話しかけられてから仲良くなった。話してみると、さばさばしていて、距離感も分かってい

るし、付き合いやすい子だ。成績も同じくらいで、お互い部活もやっていない、同類の匂いがした。人間、価値観の近い人間としか付き合えないんじゃないかと私は思っている。
　放課後になって、私はメイクに気合いを入れた。トモコに、必死になりすぎと、笑われた。トモコは、その辺おしゃれじゃないんだよな。
「いい男、っていう情報以外に、何かないの。年齢とか、生年月日とか」
「そんなのわかるわけないでしょ。あ、表札は、清川って書いてあったよ」
　キヨカワ。いい男にふさわしい、美しい名字、思わずそう呟いて、またトモコに笑われた。飢えすぎだよ、ハンターみたいだよと言って。私も笑った。
　正門を出てから駅までつながっている、通称「ワカ女通り」。ここに清川邸はあるらしい。「ここだよ」
　ものの二分も歩かないうちに、清川邸に着いてしまった。門には、「清川」の表札。間違いない。
　私は、今来た道を振り返った。この家からなら、ワカ女の校門も見えるのではないだろうか。
「あ、いた！ツカサ、こっち見てるよ」
　本当にいい男だった。一目ぼれした、と思った。顔だけでこんなに惹きつけられることがあるんだ。胸が高鳴る。この人と話したい。もっと知りたい。とっさに大きく手を振ると、男はフイッと窓際から消えた。
「あー！そんな大それたことするから！いい男は、鑑賞するだけでも十分なのに」
　トモコが残念がって言った。私はしばらく窓の方を見ていた。何歳ぐらいだろう。私よりは年上という印象が残っただけだ。
「この時間に家にいるってことは、フリーターかなぁ。この辺、大学もないし。せっかくいい男なのにねぇ」
「いい男だから、夜の仕事かもしれないよ。駅前の飲み屋街で働いているかも」
「飲み屋街ったって、居酒屋ばっかじゃん」
　トモコと勝手に想像をする。想像するだけなら自由だし、楽しい。
「ひきこもりとか」
「えー？あんな顔いいのに、もったいない」
「実は、余命いくばくもなくて療養中とか」
　想像はそこでやめた。
「いくらなんでもそれはね」
「うん、悪趣味だね」
　私たちは、いくらなんでもそこまで人の不幸を願っていない。清川さんが病気だなんて思いたくなかった。
　せっかく家とは逆方向の駅前に来たので、トモコとマックに寄った。ポテトの臭いが鼻に付く。制服に匂いうつりして、お母さんにばれちゃうかな、まぁいいか、夕ご飯をちゃんと食べれば文句は言われないだろう、でも太るか、一瞬のうちにいろいろなことを考える。
「あー、カレシ欲しいなぁ。やっぱり、女子高って難しいよね。うちなんか、学校のすぐ近くだ

から、ホント出会いなんてない。トモコはいいなぁ。駅より向こう側だもん」
「って言っても、私もまだいないけどね。でも、駅の近くでは、結構かっこいい子見かけるよ」
「現に、清川さんを発見したのも、トモコだもんね」
　トモコは、ハンバーガーを食べ終わると、ポテトをつまみだした。
「実は、ちょっと話しておきたいことがあってさ」
　妙にあらたまった顔をしている。多分、今日は清川さんで私を釣っただけで、ここからが本題だ。トモコを疑っているわけじゃないけど、いい話の裏には必ず裏がある。
「私、部活に入ろうと思って」
「部活？入学した時に、かったるいって言ってなかった？」
　私は一気に拍子抜けした。そんなことか。何か大変なお願いをされるかと思ったのに。
「私さ、中学の時に吹奏楽でトランペット吹いてたの」
　私は美術部と言う名前の帰宅部だったし、音楽、とりわけクラシックなんかには興味がなかったから、吹奏楽のことなんて興味がなかった。だから、入学して五カ月過ぎたけれど、トモコが吹奏楽でトランペットを吹いていたなんていうことも初耳だった。
「その時にトラブって部内で干されたの。まぁ、それがトラウマでね。音楽って、特に部活でっていうことになると、団体競技みたいなところがあるから、やだなって思ってた。っていうか、思おうとしてた。でも、音楽を聞いたり、放課後にラッパの音聞くと、血が騒いじゃうんだ。もう一回吹きたい、自分ならこうやって吹くって」
「吹奏楽部に入るってことかな」
「うん。だから…だからさ、今日みたいに放課後マックに寄ったりできなくなっちゃうけど、でも休み時間とか、その分」
　トモコが言いたいことは、全部わかった。私に気を使っているんだ。一緒にいる時間が少なくなっちゃうけどごめん、でも友達をやめないで。放っておいたら、そこまで言うだろう。トラウマを抱えているトモコなら、絶対。
「皆まで言うな。義理堅いなー。放課後だけでしょ。休み時間も、お弁当の時間も今まで通り、ね」
　トモコはホッとしたように笑顔を見せた。
「トランペットか。あれって苦しいんでしょ？」
「ううん、コツをつかむと苦しくなくて…」
　それからトモコは、夢中で楽器の魅力について話してくれた。バカな私には、何を言っているのかわからないところもあったけれど、楽しそうなトモコの顔を見られただけで満足だった。一つでも夢中になれる何かがあるトモコを内心羨ましく思った。自分より少し前を歩き始めてしまった友達。そのうち私にも何か熱中できるものができるのだろうか。
　トモコは、翌日、吹奏楽部に入部した。行動が早い。ずっと考えていたことだったんだろうと思った。
　トランペット経験者で、楽器を持っていると言ったら、快くトランペットパートにしてくれたらしい。パートメンバーは全部で五人で、一年生部員はトモコ一人らしく、とても歓迎してもらえたようだ。季節外れの新入部員だから、確かに先輩たちもうれしかったんだろう。

　何より、トモコ自身がとてもうれしそうだった。久々に楽器を吹いたことで、生き生きしていた。私はトモコに、きらきらと金色に輝くトランペットを見せてもらった。
「高そう」
と思わず口にすると、
「八万。安い方だよ」
と教えてくれた。八万か。私なら、そのお金で何を買うだろう。本、漫画、お菓子、どうしようもないもので消えていきそうだ。いや、八万というまとまったお金なら、ノートパソコンを買うかなぁ。そんなことを考えた。
「定期演奏会が１１月にあるの。そんなに練習できないから、私は裏方だと思うけど、良かったら見に来て」
「うーん、でも、私、クラシックはちょっと」
「吹奏楽って、堅苦しい音楽ばかりじゃないから」
　トモコは、とっても嬉しそうだった。楽器と同じようにきらきらしてる。
　案の定、放課後は暇な日ばかりになった。駅方面に行く用もないし、当然マックに寄ることもないから、無駄遣いは減った。
　私も何か楽しみを見つけなければ…と授業中に考えて思いついたのが、「清川邸のいい男」を見ることだった。多少の回り道になるけれど、私は毎日清川邸の前を通った。下手をするとストーカーで通報されるかもしれない。でも、悪いことをしているわけじゃないんだし。
　清川さんは、大抵二階の窓から外を見ていた。私はいつも元気に大きく手を振ったけれど、最初にされた時のように、フイッと無視をされた。向こうも私のことを怪しいと思っただろうけれど、毎日のことだったので、私も、ひきこもりだろうな、と思うようになった。
　お弁当を食べながら、トモコにそのことを話すと、少しあきれられた。
「やばい人だったらどうするの？油断させておいて、ある日声をかけられる可能性もあるんだよ。連れ込まれるかもしれないよ」
「でも、毎回無視するような人だし」
「第一、ストーカーだって通報されたらどうするの」
　そうなんだけど、それでも気になるんだ。いつももの悲しそうに同じ時間帯に外を見ていて、そのくせ手を振るといなくなる。恋愛というのは、追われている間は逃げたくなり、逃げられると追いたくなるなんて言うけれど、私が清川さんに抱く感情は、まさにそれだ。
「でも、毎日なんだよ。おかしいと思わない？」
　自分のおかしさは棚に上げて、トモコに言った。
「人とかかわるのが怖いのかもね。あんないい男なのに、もったいない」
　トモコはそう言った。
　勝手な想像。
　「清川さん」という、名字だけしか知らない。私は、清川さんの声を聞いてみたくなった。どんな人なのか、実際に会って話をしたくなった。

## ２　彼の名はアツシ。

　清川邸で手を振るようになって、二週間ちょっと過ぎた頃。その日は、日誌をつける日で少し帰りが遅くなった。いつも通り、清川邸を訪れると、清川さん本人が門の所にいたのだった。
　突然のことに私は驚いて、声がかけられなかった。いや、驚いたのは、突然という理由だけではなかった。
「今日は、遅いなと思って」
　清川さんの第一声がそれだった。初めて聞く声は、私が想像していたよりも少しだけ高い声だった。心臓がドキドキした。
「あ、あの、こんにちは」
　気のきいた台詞の一つも言えず、かろうじて挨拶。緊張して、声が裏返りそう。女子高に入ってからというもの、男子、いや男性と話すことはほとんどない。免疫なんてあるわけがない。
　清川さんは、口元だけで笑った。
「驚いたでしょ。僕が車いすにのってて。無理しなくていいよ。そんな顔してるから」
　多分、あからさまにじろじろ見てしまっていたんだろうと思う。恥ずかしい。偏見の目で見たつもりはないんだけれど、それでもやっぱり彼の車いすは意外だった。本当に予想外だった。清川さんは、簡単に外出できる体ではなかったのだ。
「ごめんなさい」
「いいよ。普通の反応だろ」
　清川さんは、私を値踏みするような目で見た。それから、少しいたずらっぽく、
「寄ってく？」と言った。
　でも、そんな、この人のこと全然知らないし。今初めて声を聞いたばかりだし。まぎれもなく男の人だし。何を考えているかわからないし。「障害なんてものともせず頑張ります！」っていう風な健全さのかけらもないし。何となくひねくれている印象が…。
「大丈夫だって。ほら。僕はこの通り歩けない。僕が君を襲う前に、十分に君は逃げられるから。それにバカジョに手を出すほど、僕も馬鹿じゃない」
　清川さんの言葉に少しカチンときた。清川さんも、ワカ女を「バカジョ」と呼ぶ一人なんだ。やっぱり、性格も悪い。
　ただ同時に、少し警戒心が薄れたというのも事実だった。
「では、お邪魔します」
　考えるより前に、言葉に出ていた。
　玄関は引き戸になっていた。普通は段差があるはずだけれど、車いす生活のためか、段差は無くなっていた。室内は、フローリング。すべてが引き戸。私が見た場所は、少なくともバリアフリー設計だった。二階のことが気になった。家の新しさと、二階があるということから考えて、清川さんは生まれつき足が悪かったわけではないということが想像できた。多分私の目についた場所は、あとからリフォームしたんだろう。
「何飲む？」
「おかまいなく」

「僕はコーヒーを飲むから、良ければついでに入れるけど」
「それじゃ、お願いします。あの、砂糖を多めにしてください」
「了解」
　もともと人見知りはしない方だ。清川さんもそうなのだろうか。人と話すのは慣れている感じを受ける。
　室内は車いすが動きやすいように、ほとんど何も置かれていない。とにかく無機質に整頓されている。
　あまりじろじろ見るのも悪いと思って、私はソファに腰掛けた。体が沈みこまない、少し硬い造りのソファだ。
「あの、今日はご家族の方はお仕事ですか」
「家族はいない。僕一人で暮らしている」
　こんな大きな家に？という疑問が当然浮かんでくる。それに、コーヒーを入れるのに手間取っているのを見ると、とうてい家事を一人でできているとは思えない。食事や洗濯は一体どうしているのだろう。顔色は健康的だし、着ているものも清潔でおしゃれな印象だ。体が不自由な清川さんを放って、ご両親はどうしてしまったんだろう。
「うーん、お盆に手が届かないな。悪いけど運んでもらえる？」
　手の届かないところに、普通車いすの人が物を置くだろうか。
　私は、清川さんの分もコーヒーカップを運んだ。清川さんは、ありがとう、と言った。さっきは口が悪いなと思ったけれど、話し方とか、言葉づかいは悪くない。特に、自分のことを「僕」と呼ぶあたりは、育ちの良さを感じた。年上に対して失礼だけど、かわいいとさえ思う。
　いろいろなことが気になった。名前。年齢。職業。でも、それを聞くには、まず自己紹介をしないと。
「私は、そこのワカ女の１年で、村上ツカサと言います。清川さんの名前は、なんていうんですか？」
「アツシ。清川アツシ」
　清川さんはそう言って、テーブルに漢字を書いた。
「毎日、二階からボーっと外を見て怪しい奴って思っていたでしょ。僕から言わせてもらえば、手を振る君も、十分怪しかったけど」
「ツカサです」
「あー、ツカサね。ツカサ、ツカサ」
　投げやりに清川さんは言った。名前を覚えてくれる気はあるのだろうか。
「で、僕に何か用だったの？」
「友達が、清川邸の二階にとてもいい男がいるって教えてくれて。あわよくば、お付き合いしたいなと」
　私は素直に答えた。
「さすが、バカジョだ。考えが短絡的。ここまでとは思わなかった」
　清川さんは、また差別的発言をした。

「バカジョって言わないでもらえますか」
「だって、僕のこと知りもしないのに。バカ以外の何者でもない。実際どう？車いす生活で、ひきこもり男だよ。がっかりでしょ。この通り、口も悪いし、性格もひねくれている」
　それはとても自虐的に聞こえた。いつもそうなんだろうか。こうやって、人を寄せ付けないようにしているんだろうか。最初、私に声をかけてくれた時とは、少し印象が違ってしまった。
「勝手に期待して、勝手にがっかりして、いい気味だ」
「がっかりしてません。仕方ないでしょ。かっこいいって思っちゃったんだから。声を聞きたいと思ったし、仲良くなりたいって思った。そりゃ、怪しいとか思わないでもないけど、自分が好きになった人を疑いたくないじゃない」
　清川さんは、やっぱりバカすぎる、と言ってため息をついた。人のことをバカバカって失礼極まりない。
「僕は、怪しい人間じゃないよ。足が動かないのは本当だから、安心していい。女の子に暴力をふるう趣味もない」
　そう言われて、少し悲しくなった。私は、清川さんの足が動かなければいいって思ったわけじゃない。
「毎日、二階から何を見ていたの？その体で階段を上るのって大変でしょ」
「ん？バカジョの女の子。無駄に制服がかわいいし、顔もかわいい子が多いから」
「清川さんも、十分バカでしょ。私と同じ。顔と服装で判断して」
　清川さんは、満足そうにコーヒーを飲んだ。
「男は基本的に、顔とスタイルで判断するよ。視覚で得た情報っていうのが、優れた遺伝子を残すために一番重要なんだ。女の人は、もっと中味を見るべきだ。経済力とか、そういうものを。だから、ツカサは馬鹿だと言ったんだ」
　初めて私の名前を読んでくれたけれど、よりによって馬鹿とは。
「随分と私を馬鹿にするけど、さぞかし清川さんは、いい高校を卒業して、いい大学を卒業されたんでしょうね」
「西南高校卒、Ｋ大経済学部在籍中ですが」
　西南高校と言えば、この地区一の進学校で、Ｋ大と言えば、これまた泣く子も黙る素晴らしい大学である。
「頭いいんだ」
　嫌味だとは思わなかった。純粋に、自分とは頭の構造の違う人間がここにいると思った。
「休学中で、ひきこもりだけどね。退学も時間の問題」
「清川さんって、今何歳なの？」
「二十歳」
　二十歳でひきこもりは、何度もトモコが言ったように、とてももったいないと思う。こんなにいい男で、頭も良ければなおさらだ。
「他人とかかわるのが嫌になっちゃったの？」
「足がこの通り動かないでしょ。とっても不便で。もともと面倒くさがりというのもあって、動きたくないんだ。この体のせいで、街に出たことはないけれど、障害者だっていう目で見られる

だろ。それも嫌だ」
　最初から一人で外出をするのは、すごく高いハードルなんだ。それで、ひきこもっているんだ。
「それでも今日は、かなり頑張って、ツカサを迎えに行った。毎日手を振ってくれる、バカそうだけどかわいい女の子がなかなか来ないから気になった。ツカサなら、僕の足を見ても大丈夫な気がした。人とかかわるのが嫌なわけじゃないよ」
「そう、それなら安心した。車いすを見て驚いたけど、それぐらいでびびったりしない。馬鹿そうってさぁ、一言多いよ」
　清川さんは勇気を出して、かなり頑張って外に出てきてくれたわけだから、それには敬意を表することにした。かわいいとも言ってくれたし。そんなことで気分を良くしてしまう私は、お手軽だと思うし、確かに馬鹿なのかもしれないけれど。
　私はコーヒーを飲んだ。苦味と、グラニュー糖の痛いほどの甘みが喉を通っていく。
「今度、デートしようよ」
「デート？物好きだな。僕の声も聞いて、性格もわかっただろうに」
　清川さんは、ヤマアラシみたいに完全武装するタイプだ。プライドも高い。だから、その武装を解いてみたい。その下に眠っている、本当の彼を知りたい。
「そ。わかったから言ってる。言ったでしょ、車いすぐらいでびびらないって。私が連れ出してあげるよ。塔に幽閉された王子様を」
　清川さんは、初めてちゃんとした笑顔を見せた。ドキドキするほどのいい笑顔だ。この人のこういう顔をもっと見たいと思った。
「何のおとぎ話？」
「グリム童話のラプンツェル。知ってる？」
「知らない」
「物語では、塔に幽閉されているのが女の子で、その歌声にひかれて、王子は女の子の髪の毛をのぼって、会いに来るんだけどね」
　清川さんは、興味なさそうに、ふうんと言った。
「まるで、私と清川さんみたいじゃない？この家に幽閉された清川さんに、私は会いに来ているんだから」
「やっぱり、馬鹿だろ」
　失礼な。人が精一杯ロマンチックな話をしているというのに。せめてロマンチストと言って欲しい。
「一応、楽しみにしてる」
　外がだいぶ暗くなってきた。田舎とはいえ、暗くなると怖いから、そろそろ帰ることにした。
「コーヒー、ごちそうさま。それじゃ、清川さん、今日は帰るね」
「ツカサ、僕の名前覚えてくれた？」
「アツシでしょ。いくら記憶力が悪くても、気になる男の名前くらいすぐに覚えるって一の」
「そ。アツシだから」
　念を押すように清川さんは言った。もしかして、名前を呼んでもらいたがっている？私、調子

にのりすぎ？
「アツシ」
　確かめるように、復唱する。清川さんは、それについて全く文句を言わなかった。
私は、「バイバイ、アツシ。また来るね」と言った。
　それが、私とアツシの始まりだった。

## ３　コンビニ

　トモコには、アツシのことを話しておきたかった。アツシのことを教えてくれたのは、トモコだから。ただ、アツシの足が不自由なことを話すのは、私がもう少しアツシと仲良くなって、トモコにアツシ本人を紹介できるまで待とうと思った。
「清川さんと話したよ」と言うと、トモコはすごく驚いた。
「積極的！」
　私が積極的だったのか。私は、清川邸を訪れていただけにすぎない。最後に勇気を出して家を出てきたのはアツシだ。
「清川アツシさん。西南高校卒、Ｋ大経済学部休学中。二十歳、だそうです」
　必要最低限の情報。口が悪い。性格もひねくれているかも。そういうことも話したかったけど、それもまだやめておくことにした。変な先入観を持たせるのは好きじゃないから。
「もし、ちゃんと仲良くなれたら、トモコにも紹介する」
　トモコは能天気に、「仲良くなってね。そしたら、Ｋ大生の友達を紹介してもらいたいから」と言った。
　毎日清川邸を訪ね、アツシと話すのが私の日課になった。
　清川邸のインターホンを押すと、アツシのちょっと待ってねと言う声がした。引き戸のカギが開いて、アツシが顔を出す。
「入れば」
「入ればって、いい加減どこか行こうよ」
「とりあえず、入ってよ」
　毎日のことだが、何を渋っているのかわからない。駅前の方に行って、マックに寄って、ぶらぶらしたいだけなのに。とりあえず、アツシに言われるまま家に上がった。
「念のために聞いておきたいんだけど、僕をどこに連れて行こうとしているのかな」
　自分が考えたプラン、つまり、駅前のマックに寄ってぶらぶらするプランを言うと、アツシは大きなため息をついた。
「そこまで無計画だとは思わなかった」
「ひきこもっているくらいだから、ファーストフードとか懐かしいかと思って。私の財布にも優しいし。それともハンバーガーとか、口に合わない？」
　大きな家に住んでいるお坊ちゃんだ。食べるものが合わないという可能性はありそうだ。
「ハンバーガーは好きだし、食べたいとも思うよ」
「では、一体何の文句が」
「遠いだろ。どう考えても」
「遠いって、十分ぐらいでしょ。私が車いすを押すし」
「階段を使えば十分かもしれないけど、普通の道を行ったら、三十分はかかる。マックでハンバーガーを食べて三十分。帰り道で三十分。ぶらぶらする暇がどこにあるの。暗くなって危ないだろ」
　私やトモコにとっては当たり前なのに、アツシにとっては当たり前じゃない。出不精ってだ

けじゃなくて、アツシには、不便なことがたくさんある。思わず謝りそうになった。でもそれをしたらアツシをかわいそうだと思うことになる。対等に付き合うことができない。お互いが我慢することなく、対等にいないと友達関係は成立しない。まずは、お友達から。
「わかった。じゃ、マックに行くのは、休みの日にしよう。今日は近所を散歩するくらいでどう？」
　アツシは無言でうなずいた。
　実際に車いすを押していて気がついたことは、歩道が思ったよりも狭くて、段差が多いということだ。段差を乗り越えるたびに、車いすから振動が伝わる。
　この道でベビーカーを押したらどんな感じだろう。やっぱり、赤ちゃんにも同じような振動が伝わるんだろうな。自分がもし母親という立場になるとすれば、注意しながら押すだろうなと思った。
　アツシも何回か外出しようとしたんじゃないかと思った。挫折した気持ちはどんな風だったんだろう。そのうち、外に出るのも怖くなったのかな。
「あれ、こんな近くにコンビニができたんだ」
　少し嬉しそうにアツシが言った。
「入る？」と聞くと、「ああ」とうなずいた。
　入口は経費節約のためか自動ドアではなかった。私はアツシを置いてドアを開けると、アツシを店内に入れてから、ドアを閉めた。マットの所で車輪が少し引っかかった。グイっと力を入れて、普通のフロアまで移動した。
「サンキュ」
　わけもなく胸が高鳴った。ちょっとお礼を言われたくらいで、単純かもしれないけれど。
「何か買う？」
「久々に雑誌買いたいかな」
　雑誌売り場の前で車いすから手を離すと、アツシはスーッと移動した。それから週刊の漫画雑誌と、月刊の男性ファッション誌を手に取った。学生時代、いつも買っていたものかもしれない。とってもうれしそうに膝の上にのせている。買い物をするのも、久しぶりなんだろうなと思った。
「アツシ、ちょっとかご持ってくるね」と言うと、「よろしく」と言った。かなり素直だ。
　アツシは、車いすを回転させて、男性用の整髪料の棚を見ると、興味深そうにヘアワックスを手に取った。
「買う？」
「いや、今日はいいや。こういうのって、次から次へと新製品が出るもんだなと思って。僕が知らない間に、新しいメーカーの物が増えてる」
　そう言って、ワックスを棚に戻した。
　それからもう一度雑誌コーナーに戻った。どう見てもエロ本を物色しているので、アツシの趣味を探るのもどうかという気がして、目をそらした。
「ツカサ、手が届かないから取ってよ。あれ」

　うわ、そう来るか。
「これ？」
　手に取ろうとして、アツシの顔を見ると、にやにやとからかうように笑っていたので、伸ばしていた手でそのまま頭を叩いてやった。
「結構ウブだね」と言って、けらけらと笑った。こんな顔もするんだ。怒ったり皮肉を言うばかりじゃないんだ。妙に新鮮だった。私は照れくさいのと、アツシの別の顔を見たうれしさとで顔が熱くなるのを感じた。
　それから車いすの向きを変え、店内をぐるっと見た後で、レジで会計を済ませた。レジ袋がアツシの膝の上にのって、動くたびに気持ち良さそうにカシャカシャいった。
　コンビニの外で、アツシが、
「ツカサ、肉まん」と言って、私に半分分けてくれた。その場でほかほかのそれを食べた。二人でオレンジ色の夕焼けを見た。
「こういうの見ると、感動するよね」
「生きててよかったのかな。楽しいとか思ってもいいのかな」
　アツシが言った言葉が、胸に突き刺さった。
　イキテテヨカッタノカナ。
　一体何があったら、こんな悲しいことを言うようになってしまうのだろう。私は、まだアツシの身に起こった出来事を聞く勇気がなかった。

## ４　彼の日常

学校帰りの清川邸訪問、アツシとのおしゃべり、コンビニへの外出。私がしていることは、友達や恋人にすることと違う気がするけれど、アツシの笑顔を少しでも見たくて、ボランティアのように続けた。

アツシは少しずつだけど、自分で車いすの操作をするようになった。お店の人も顔を覚えてくれて、私たちが行くと親切にドアを開けてくれた。アツシは、内弁慶の外仏を地で行く奴で、いつも礼儀正しかった。

だいぶ打ち解けたので、少しずつ疑問に思っていたことを聞いた。例えば、家事の問題。とてもアツシが食事を作ったり、掃除をしたり、洗濯をしているようには思えなかったからだ。その割に、アツシは健康的な顔色だったし、部屋はいつもきれいだったし、服も清潔だった。アツシは気分を害した風もなく、毎朝お手伝いさんが来て、一日分の家事をしていってくれるのだと教えてくれた。

お風呂とトイレはどうしているのかということも重要だった。アツシは、リフォームされたお風呂とトイレを見せてくれた。時間はかかるけれど、それくらいは自分でできると言った。ただ苦笑いして、髪は切っていないと言った。もう少しさっぱりしたいけれど、美容院に行って椅子を移動するのはまだ大変だから、と。切ってあげようかと言ったら、速攻で断られて傷ついた。

欲しいものがあった時、買い物はどうしているのかも聞いた。アツシは、自分の部屋に案内してくれた。やっぱりその部屋も片付いていて、机とベッドと本棚が置いてあるだけだった。机の上には、ノートパソコンが置いてあった。アツシはパソコンを立ち上げると、インターネットの画面を開いた。どうやら欲しいものはネットで手に入れているらしかった。

気になっていることは、そのほかにもいろいろあった。働いていないけれど、収入はどうしているのか。大学に復学するつもりはあるのか。将来はどうするのか。何より、どうして不自由な体になってしまったのか。

ただ、もし自分がアツシと同じように不自由な体だったとしたら、私が今感じている疑問は、どれも聞かれたくない内容ばかりだ。そう思ったら聞けなかった。

学校のある日は清川邸に行き、学校のない日はアツシのことを考えた。休日なのに、学校まで行って、ワカ女通りを通り、駅前のマックまで遠回りして歩く。アツシの家からどれくらい時間がかかるか、坂の角度はきついか、車通りは多いか、段差は、道の広さは。すれ違う人に怖い人はいないか。考えることはたくさんあった。

自分でさんざん計画を練って、ついにアツシに駅前のマックにハンバーガーを食べに行こうと提案した。アツシは、その時はじめて「ありがとう」と、私に丁寧に頭を下げた。こんなに考えてくれるとは思わなかったと言って。それから、もうひとつ調べてほしいことがある、と言った。

それは、トイレの問題だった。ファーストフード店のトイレは、絶対的に狭くできている。車いすでは入れない。一番近くにある障害者用トイレの場所を調べてくれないか、と。

何といっても駅が近くにある。探すのに時間はかからなかった。

何もかもがうまくいっていた。アツシを手助けして、感謝される。私は調子にのっていた。生

まれて初めて、自分を必要としてくれる人に出会えて、私にとっての生きがいになってしまっていた。

## ５　初めてのデート

　日曜日、私とアツシは駅前のマックに来ていた。アツシは、「本当に久しぶりだな」と、うれしそうにビッグマックにかじりついた。運動量は少ないとはいえ、二十歳の男だ。ペロリとビッグマックを平らげて、ポテトのＬをつまんだ。時々指に着いた塩をなめている。
「アツシって、彼女いたの？」
　言ってから、自分でも愚問だと思った。これだけ顔が良くて、頭もいいのに、彼女がいなかったはずがない。私のこともからかうくらい、余裕があるわけだし、女の人と話慣れていないという印象も全くない。
「いたよ。スタイルが良くて、かわいかった。性格も良かった」
　少し思い出すように、アツシは言った。
「足がこんな風になっちゃって、僕が当たり散らしたもんだから、別れたけどね。それまでの僕は、本当に優しくて良くできた男だったから、彼女も本性を知って幻滅したんじゃないかな」
「その人のこと好きだったの？」
「好き、ねぇ。かわいかったから、連れていれば自慢になった。性格がいいから付き合いやすかった。スタイルも良かったから、セックスも燃えた」
　私から見たら、アツシの女の人との付き合い方というのは、すごく割り切っていて、随分大人だ。でも、それで幸せだったのかな。アツシも、相手の女の人も。
　アツシがストローに口をつけた。
「あ、もしかして、僕が彼女いない歴＝年齢とでも思った？甘いな」
「それって、恋愛なのかな」
「一つの形じゃない？じゃ、ツカサの考える恋愛ってどういうもの？」
「会えば、胸がドキドキして、手をつないだ日には自分の心臓の音まで相手に伝わるんじゃないかって気がして、いつもその人のことばかり考えて」
　アツシは失礼にも吹き出した。
「すごい。今の世の中に、そんな少女漫画みたいな恋愛を考えている人間がいるなんて」
　そうなんだよな。私もアツシと会っているとき、いつも胸がドキドキしているわけじゃない。アツシのことはよく考えるけれど、どうやったら外出が楽しくなるかってことばかりで、結局私が考えている恋愛というのとはかなり違う気がする。人を好きになるって、どういうことなんだろう。どういう気持ちが、恋している状態なんだろう。
「さて、そろそろ行こうか。トイレにも行っておきたいし」
「うん」
　私たちはマックを出た。それから駅の身体障害者用のトイレに行った。
「工事中」
　ちょっと待て。そりゃないだろ。この前チェックした時は、問題なかったのに。あわてて駅員さんにほかのトイレの場所を教えてもらった。
「そんなに慌てなくても、まだ大丈夫だよ」
　アツシはそう言ったけど、私は頑張って車いすを押した。

　駅員さんが教えてくれたトイレは、今いる場所と反対側の西口にあるトイレで、早速階段に阻まれた。ああ、もう。
　回り道をして、スロープを上って降りて、ようやくトイレにたどりつくと、すでに先客がいた。
「アツシ、ごめん。間に合いそう？」
「この中の人が大か、小かによる。便秘の人なら最悪」
　こういう時ほど、時間というものは長く感じるものだ。
　そして出てきたのは、明らかに健常者のおばさんだった。アツシが飛び込むようにトイレに入った。少しおばさんにぶつかる。
「ちょっと、なんなの？」
「なんなのじゃねぇよ、ばばあ！」と、私。中のアツシに聞こえたかどうかはわからない。
　トイレの問題は切実だ。もし失敗したら二度と外出しなくなってしまうかもしれない。私だったら、そんな恥ずかしい思いは嫌だ。しかも異性と一緒にいて。せっかく、外に出るようになったのに。これからもっと守備範囲を広げていく予定だったのに。
　しばらくして、アツシが出てきた。
「大丈夫、ギリギリ間に合ったから」
　アツシはそう言ったけど、言葉とは裏腹に明らかに元気がなかった。
「ごめん、アツシ。私の詰めが甘かった」
「気にしなくていいよ。予想外だったんだから」
　マックの帰りに駅前をぶらぶらする予定で計画を立てていたけれど、アツシがあまりにしゃべらないので、そのまま帰った。
「着替えてくる。ズボンは大丈夫だったんだけど、間に合わなくて、パンツの方は少し汚しちゃったんだ」
　アツシは力なく言って、バスルームに消えていった。前付き合っていた彼女の話をしたとき、私の恋愛観を笑った時のアツシとは、明らかに別人だった。
　どうしよう。こういうとき、なんて声をかけたらいいんだろう。わからない。気にしないで、最初は失敗もあるよ、なんて無責任なこと言えない。失敗って、いくら足が不自由でも、二十歳になってまでそんな失敗は嫌だろう。今頃どんなにみじめな気分でシャワーを浴びて、後始末をしているかは想像できる。私だったら、何も声をかけてほしくない。むしろ、帰ってほしいかもしれない。
　十五分ほどして、スッキリした顔でアツシは出てきた。
「烏龍茶のＬサイズは飲みすぎだったと、反省してる。だから、これはツカサが気にすることじゃない」
　私がひどい顔をしていたのか、フォローされてしまった。
「しかし、ツカサの言葉づかいは、おかしかったな。ばばあって…。あのおばさんがどんな顔してたのか見てみたかったよ」
「だって、明らかに健常者なのに」

「身障者用トイレは、健常者の人も利用していいんだよ」
「だけど」
「僕は、こんな体だから、見た目で障害があるってわかる。でも、中には見た目では分からない人もいる」
「あのおばさんは絶対に違う」
「どうしてそれがわかる？」
　アツシは、コーヒーを入れてくれた。お盆にのせて持ってきてくれる手つきが様になっている。慣れたんだなと思う。
「ツカサ、今日のためにどれだけ準備してくれた？」
　そんなのわからない。ずっとアツシのことを考えて、たくさん調べて。とにかく久しぶりの外出を楽しんでほしかった。それだけだった。みじめな気分にさせたいわけじゃなかった。
「どんなにたくさん調べても、準備をしても、結果はこれだよ。トイレの問題一つとってみてもそう。どこに行くにもずっと考えなきゃならない。僕と友達になる、付き合うってことは、長時間の外出も、ロマンチックなデートもできないってことだ。そんなの嫌だろ。それがわかったら、もう僕には付きまとわないで欲しい」
「いやだ」
「今日は、僕もみじめな思いをした。それは、ツカサのせいじゃないし、そのことでツカサを怒っているわけじゃない。でも、僕の顔を見て、つらそうな顔をするのはやめてくれないか。僕は一層みじめになる。頼むからもう帰ってくれ」
「いやだ」
「いいから、帰れ」
　怒鳴られた。
　線をひかれた。
　拒絶された。
　もっと、調べておけよと、私のせいにしてくれた方が良かった。なじられるよりも、こたえるということを初めて知った。

## ６　共依存

　清川邸に行って、インターホンを押しても返答がなくなった。
　くそう、アツシの奴。一回失敗したくらいで。わかっている。その失敗が大きかったことも。私の対応だって、失敗だった。でも、あの時一体どうすればよかったんだろう。慰めることも、笑い飛ばすことも、きっと何をしても駄目だった。
「どうした？元気ないねぇ」
　トモコに声をかけられた。ぽつぽつと話し始めると、
「ちょっと待って、それ、長くなる話だよね」
　そう言って、トモコは消えてしまった。放課後だし、部活優先だよね。最近のトモコは、部活に熱中している。お弁当の時間も部活の話が多い。寂しいけれど仕方がない。そう思った時、トモコが、「今日、休むって言ってきたから。理由を話したら、先輩が許してくれたから」と言って戻ってきた。それだけで、泣きそうになった。
　私たちは、久しぶりに二人で帰った。清川邸の前を通ったけれど、二階に人影は見えなかった。気付くと、近道ではなく回り道をして、駅前に来ていた。アツシと通るために、何度もシミュレーションした道。アツシと通った道。
　トモコには、アツシが車いす生活をしていること、この前の外出で私の立てたプランが悪かったことで口をきいてくれなくなったことを話した。もちろん、アツシの失敗のことまでは話していない。
「厳しいことを言うようだけどさ、それって清川さんが甘え過ぎていると思う」
　トモコは、はっきりとそう言った。
「散々ツカサに調べてもらっておいて、デートがうまくいかなくて、当たるってどうなの？ツカサが悲しい思いをして、それを見るのがつらいって、その言い分もわがままだと思う。清川さんは一体何をしたっていうの。ツカサにまかせっきりで。それに」
　トモコは容赦なかった。アツシにだけではなく、私にも。
「ツカサもどうかしてる。一方的に与えるだけなんて、依存関係になるだけでしょ」
　依存関係？聞き慣れない言葉だ。
「そういうの、共依存っていうんだけどね。つまり簡単に言うと、清川さんはツカサに迷惑をかけて、ツカサは迷惑をかけられることに自分の存在意義を見つけている不健全な関係ってこと。お互いが依存しあう関係」
「でも、アツシは不自由なんだよ」
「ツカサは、何でもやってあげたくなったんじゃないの？清川さんの世話をすることに生きがい感じたりしなかった？」
　アツシに喜んで欲しくて、何でも自分でしてあげようとしていた。アツシはそれでうれしかったんだろうか。私が優越感に浸りたかっただけじゃないか。
「友達とか、彼女になりたいって思うんなら、今までの関係はやめた方がいいよ。それに、これって逆に清川さんの自立の機会を奪っていると思うよ。清川さんを本当の意味で不自由にしちゃっていいの？」

　トモコの言葉は、胸に刺さった。私が善意でしていたことは、アツシの為にならないことだったんだ。下手をすると、友達にもなれないところだった。
　トモコは、私と同じぐらいの成績のはずなのに、ずっと物知りだ。そう、トモコに言うと笑った。
「ツカサの方が、よっぽど段差とか、バリアフリー環境のことに詳しくなったと思うけど」
　トモコが「共依存」という、難しい言葉を知っているわけ。アツシと仲直りしたら、聞いてみようかなと思った。将来の夢と関係があるのかな、話してくれるだろうか。
　トモコと別れるときに、仲直りしたら絶対に紹介してよ。と念を押された。
　家に帰ってから、どうやってアツシと話そうか考えた。今まで通り清川邸に行っても、無視をされるだけだ。例えば荷物が清川邸に届いて、アツシがサインをしにくる瞬間を狙えばいいんだろうけど、頻繁にネットショッピングをしているとも思えないし、ずっと見張っているのも非現実的だ。
　その時、思い当たったのが、「毎朝来ているお手伝いさん」のことだった。その人が来ているときに話をつけるしかない。
　私は、さっそくトモコに電話をして、明日休むと伝えた。トモコは、がんばれ、と言ってくれた。

## 7　アツシとの対決

　翌日、決行した。いつもはぎりぎりまで寝ているのに、朝六時に起き、七時には家を出た。それから、清川邸の前で張った。天気が良くてよかった。
　八時、五十代ぐらいの女の人が、清川邸を訪れた。
「おはようございます」
　声をかけると、少し怪しまれた。精一杯、普通の高校生として振る舞うことにした。今日は、ナチュラルメイク。バカジョの制服を着ているけど、真面目な女の子に見えるはず。頑張れ、私。礼儀正しくいけば大丈夫。
「いつもアツシさんに勉強を教えてもらっています。アツシさん、昨日の夕方に熱が出てしまったので心配できました」
　我ながら見え透いた嘘だと思う。いつばれやしないか、冷や汗ものだ。でも、おばさんは信じてくれた。
「え？本当ですか？病院に連れて行った方がいいのかしら。そこまでは私の仕事じゃないんだけど」
「風邪薬を飲むって言っていたから大丈夫だと思います。もし調子が悪そうなら、私が付き添ってもいいですから」
「いつも私は、清川さんが寝ている間に家事を済ませちゃうから、接点ないのよ」
「そうなんですか」
　アツシはやっぱり寂しい生活しているんだ。一日中誰とも口をきかない日もあるのかもしれない。
「あの、アツシさんの様子を見てもいいですか」
「そうね。お願いします。私はそこまでかかわっちゃいけないことになっているから」
　勝手知ったる清川邸に上がり込み、そっとアツシの部屋のドアを開ける。アツシはまだ夢の中だ。お手伝いさんが、できるだけ音をたてないように家事をしている気配がする。三十分ぐらいして、静かに戸が開いた。お手伝いさんが、口だけ動かして、「帰ります。よろしくお願いします」と言った。よかった。学校のことを聞かれなくて。
　アツシは一体いつ起きるつもりなんだろう。放っておくと、ずっと寝ていそうな気がする。本棚を見ると、大学の教科書と思われる、難しいタイトルの背表紙が並んでいた。その下の段には、小説。コンビニで買った漫画雑誌も入っている。机の上には、無造作にファッション誌が置いてある。所々ドッグイヤーで目印がしてあった。
　暇だ。
　以前、弟の部屋のがさ入れをした時のことを思い出した。
「男の人のベッドの下って怪しいっていうよね」
　一人つぶやき、ベッドの下を見ると、やっぱりあった。引きずり出してみて、中を見る。大胆。…アツシって、外人が好きなの？うちの弟が中学三年。アツシが二十歳。男というのは数年のうちに興味が変わってしまうものだのだろうか。私はいろいろな疑問を持ちつつ、エロ本をベッドの下に戻した。

　それはさておき、アツシも普通の男なんだな、と安心した。プライドは高いけど、その分傷つきやすいけど、ファッション誌を読んでおしゃれにも気を使う今どきの男の子。ちゃんと女の人の裸にも興味を持つ普通の男の子。二十歳だから、男の子って年でもないか。
「アツシ、起きろ！」
　頭をペシッと叩いても、布団を深くかぶるだけで起きない。布団をはがして、「アツシ、出かけるよ」と言うと、ようやく寝ぼけたように目を開け、茫然とした表情になった。
「なんでいるの」
「お手伝いさんに入れてもらったから」
「もう、来るなって言ったよな。どういう神経してるんだ」
「私は納得してない」
　アツシはゆっくりと起き上った。それから手を使って、両足を床に下ろし、車いすを引き寄せると、よっといって移動した。
「着替えるから、いつもの部屋に行ってて」
　寝起きで機嫌が悪いのか、ぶっきらぼうにそう言った。
　テーブルの上には朝食が用意されていた。ラップがかけてある。多分、冷蔵庫の中には昼食や夕食が入っているんだろう。さっきのお手伝いさんが用意をしてくれていたんだ。
「なんなの。朝から。不法侵入みたいな真似して」
「朝からって、もう八時。まっとうな人間なら起きる時間。それに毎日無視して、一生私と口をきかないつもりだったでしょ。私はそれは納得できない。今日もまた出かけるからね」
「僕はもう外に出ない」
「いい加減にしろ！甘えんな。一回失敗したぐらいで」
「うるさい」
「一生閉じこもってるの？」
　アツシは自虐的に笑った。
「そうする。知ってる？僕が一体いくら持ってるか。両親の保険金のおかげで、サラリーマンが一生かけて稼ぐ以上の金を持ってるんだ。しかも定期的に貸している土地の収入も入る。一生この家に閉じこもって、遊んでいても食っていける。それってすごく恵まれたことだと思わないか」
　恵まれたこと、一体何が恵まれているんだろう。お金があるということは、障害者としては恵まれているかもしれない。でも、両親もいなくて、友達もいなくて、ずっと家にこもることの何が恵まれているんだろう。
　私はアツシの頭をぶったたいた。アツシが少し顔をしかめて、頭を押さえる。
「寂しい人生送るなバカ。バカジョってバカにする、アツシの方がよっぽど馬鹿じゃん。コンビニ行って、漫画を買うくらいで喜んでるやつが、お金の使い方知ってるとも思えない。遊び方も知らないくせに。どうせなら高級外車十台くらい買って、毎日女をはべらせたら？」
「バカジョの発想は、短絡的で、貧困すぎる。金持ちが全員、車と女に金をかけると思うな」
「それなら、何に使うの」

「パソコンとか、本とか」
　あからさまに、車よりお金のかからないものをアツシは言った。家で遊ぶなんて、たかが知れているのだ。アツシは、大馬鹿だ。
　とりあえず、怒鳴ったら腹が減った、と言って、アツシはご飯を食べ始めた。
「人生に目標を持とうよ」
「それなら聞くけど、ツカサの目標って何？」
「それは、まぁ、いい男と結婚して、子供は二人くらい」
「バカすぎる」
　アツシは、軽蔑するように言った。
　アツシの言うとおり、私はバカだ。将来の夢なんてない。こんなバカに叶えられる夢なんてない。きっと資格だってとれない。
　中学生の頃からぼんやり生きてきた。「将来の夢」なんてタイトルの作文を提出する日には、登校拒否を起こしたいほどだった。小学生の時はどうだっただろう。アニメのキャラクターの名前を言っていたかもしれない。
「よく、車いすでバスケとかしてるじゃん。ああいうの、やってみたら？友達もできるかもしれないよ？」
「漫画の読みすぎじゃないの？」
「車いすマラソンとか、パラリンピックめざすとか」
「あのさ、障害者全員ひとくくりにしないでもらえる？僕は、スポーツはもう二度としない」
　ふくれっ面で、ご飯を食べ続けるアツシ。私の提案が悪いのか、あくまで、後ろ向きだ。
「障害者全員が、前向きで、頑張っていると思ったら大間違いだ」
　それをお前が言うか。とことん、ひねくれている。あきれてしまう。
「アツシこそ、夢ないの？大学行ってたんでしょ」
「何一つできることなんてないから、もう夢はみない」
「よくわかった。彼女に捨てられた理由。マジでうざい。こっちまで負のオーラに飲み込まれる」
　はっきり言ってやった。一瞬アツシが息をのんだ。
「自分のことを棚に上げるなよ。不法侵入したツカサも十分うざいんだよ」
　うざい、か。自分ではつい言ってしまう言葉だけれど、言われるのはこたえるな。
「人生って長いんだよ。足が動かないからって、そこで止まっているのは損だよ。コンビニに行った時、どうだった？また来たいって思ったでしょ。ハンバーガーだって、また食べに行きたいでしょ。出来立ての温かいやつを食べたいでしょ。話相手いないと寂しくない？友達とか、彼女とか欲しくない？結婚して家庭を持ちたいとか思わない？」
「友達も彼女もみんな離れて行った。ツカサだって、僕がこの調子だったら嫌だろ。うざくて離れたくなるだろ」
「いい加減に私を試すのはやめてもらえる？今日がダメでも、明日も、明後日も来るからね」
　アツシはとうとう根負けして、困ったように笑った。
「どうして僕にこだわるの」

「好きだから」
　アツシと一緒にいても、ドキドキするわけじゃない。最初は、顔が好みだったけど、性格が悪いことも分かった。誰かに自慢できるような男でもない。でも、アツシが心から笑っている顔を見たいと思う。笑った顔を見たら、もっと好きになれる気がする。
　私にとって「好き」っていうのは、「一緒にいたい」と思うことであり、「笑顔を見たい」と思うことなんだ。
「好きって簡単に言うけど、一体僕の何を知っているの」
「あのさ、これだけ後ろ向きで、性格が悪い男にそう言ってあげているんだから、少しは感謝したら？こんなに酷い姿を見せられて、さらに嫌いになるのも難しいと思うよ」
「ひどいな」
　アツシの表情がようやくおだやかになった。私は黙って、アツシがご飯を食べ終わるのを待った。ご飯粒の最後の一粒をきれいに食べたアツシは、茶碗とお皿を流しに運んで行った。それから、水道の水を出し、たらいに少しためると、戻ってきた。
「で、今日はどうするの」
　ホッとした。根負けしただけかもしれないけれど、ようやく普通に話してくれる。
「今日は、この前のリベンジをしよう。駅前のマックに行って、昼ご飯を食べよう。トイレが直っていなかったら、駅員さんに文句を言おう。それから、床屋か美容院を探して、髪を切ってもらおう。その長髪、相当似合ってない。だいなし」
　いくら服をおしゃれにしても、うっとうしく髪を伸ばしていたらもったいない。せっかくきれいな顔をしているんだから、それが髪で隠れるのもどうかと思う。
「わかった」
　アツシは素直に言った。

　アツシは、バスルームの方に消えていった。身支度を整えているんだろう。それから少しして、バッグを小脇に抱えてきた。
「中身、何？大きいけど」
「着替え。ちょっと心配だから」
「あっそ」
　努めて気にしないように言った。
　この前のように、車いすを押さなかった。アツシもそれを望んでいる風ではなかったから。
「アツシ、この車いすのデザイン」
「ダサいって言いたいんだろ。病院に置いてあるのとそう変わらないし、操作もしにくいんだ」
「お金持ってるんだったら、まず、こういうところに使ったら？」
「うん」
　秋風が気持ちいい。沿道に所々コスモスが咲いて揺れていた。ピンク、白、濃いピンク。そよそよと揺れていた。
　まず、どこに行くかを聞くと、髪を切りたいと言った。駅の近くで何軒か知っているけれど、入りやすいお店だろうか。入口が広くて、店員さんの気がきいて、快く迎えてくれる店がいい。
　私が知っている三軒は、すべて入口の問題でだめだった。狭かったり、階段だったり。なかなかアツシに優しい店はない。
「ちょっとトイレに行ってくる」
　やっぱり、この前の身障者用トイレは故障中だった。スロープを上って、駅の反対側に移動し、そこのトイレを利用した。
「いつ直るんだろうね」
「予算が厳しいのかな」
　二人でそんなことを話した。
　改札の所でおばあさんに話しかけられて、丁寧に受け答えをしている駅員さんがいた。アツシは、おばあさんの話が終わるのを待って、駅員さんに話しかけた。
「すみません。身障者用のトイレのことなんですが」
「東口のトイレは壊れています。西口は、ちょっと遠いんですが、そこを入ったところからスロープになっていますので」
「はい。あの、実は二週間前に来た時も壊れていました。僕はその時失敗してしまって。こんなこと、あなたに文句を言っても仕方がないんですけど、身障者用トイレは数が少ないので、できるだけ早く直していただけませんか」
駅員さんは、「大変申し訳ありませんでした。すぐ直すように手配をします」と言った。
　くそ、まだ手配してなかったか。と心の中で毒づいた。世間は、多数決の法則ですべてが動いている。アツシのような少数派には冷たい。私も、アツシがいなかったら気付かなかったことだ。
　少数の身障者のためにある、広いスペースのトイレ。健常者は、「こんなの無意味。場所の

無駄」なんて思ったりする。でも、アツシには必要なものなのに。
「ほかに使いにくいところはありますか。駅のことですので、気になる所はまたご指摘ください」
　世の中捨てたもんじゃない、少しだけ私の気持ちも優しくなった。
　私たちはそれから駅ビルに入った。案内板で美容院を探す。床屋でもいいんじゃないの？と言ったら、きれいなお姉さんにシャンプーしてもらいたいし、切ってもらいたい。と真顔で言われた。
　駅ビルの最上階に、美容室「シエル」はあった、入口はオッケー。中もごちゃごちゃしていない。これもオッケー。どう？と話しかける前に、アツシはスイーッと吸い込まれるように入っていってしまった。
「カット、お願いしたいんですけど」
　店員さんはアツシに驚く様子もなく、笑顔で、いらっしゃいませと迎えてくれた。雰囲気もオッケーだ。
　私は、入ったところのソファに座って待つことにした。店員さんが、よかったらどうぞ、と紅茶を持ってきてくれた。店員さんの心配りもオッケー。次は私もここに来ようかなと思った。
　アツシは願い虚しく、ずっと男性店員さんに接客されていた。何を話しているのかはわからないけれど、時々笑っている。うざいと言われても、アツシに会って、連れ出してよかったなと思った。
　私も結構ひどいことを言った。彼女に捨てられたとか、うざいとか、負のオーラとか。自虐的なアツシは情けなくて見ていられなかったけれど、こんな顔ならいくらでも見ていたい。泣きごとを言わず車いすを操作する姿も、駅員さんにトイレのことを話した姿も、かっこよかった。
　三十分ほど待っただろうか。さっぱりと短い髪になったアツシが、スイーッとやってきた。女性店員さんに、清川君似合う！と言われて照れている。カットを担当していた、店員さんが、「ツカサちゃんもよかったら、次は清川君と一緒に切りに来て」と言ってくれた。店員さんたちに見送られ、美容院を出た。
「どう？」
「似合う、似合う。短い方がいいね。男っぷりが上がった」
　まんざらでもない様子である。
「さっき切ってくれた人に、妹さんかわいいねって言われたよ」
　妹…。そうきたか。そう見えるか。今の状態は押し掛け女房みたいだし、心配して世話を焼いているだけだもんな。アツシと恋人同士になれるのはいつの日か。
「ちゃんと、彼女だって訂正しておきましたよ」
「彼女」
顔が熱くなる。
「いいよな、それで」
　私の顔を見たアツシが真剣だったので、そのままうなずいた。
　この後、何度となく私はアツシに驚かされることになる。いつだってアツシは唐突で、一回決

めたら頑固に突き進む。この時の私はまだ知らなかった。
「せっかくだし、昼ごはん、ここのレストランで食べようか」
「ちょっと待って。それは私のお財布に優しくないから」
「男が女におごるなんて、当たり前だろ」
「それは不健全。特に今は、二人とも働いていないし。アツシが働くようになったら、そのお金でごちそうになります」
「何年先の話。まぁ、いいや。とりあえず今日は僕とツカサが付き合うことになった記念ということで、僕が出すよ。僕が先に告ったんだからいいよね」
　付き合う、告った、そんな言葉の一つ一つに心が揺さぶられ、顔が熱くなる。私の返事も聞かず、アツシはオムライスの専門店に吸い込まれていった。
「さっきの美容室、いい雰囲気だったね。私も今度からあのお店に行こうかな。ねえ、金髪ってどう思う？」
「校則で禁止されてないの？バカジョに通ってて金髪だったら、ヤンキー以外の何者でもないからやめてよ」
　付き合うことになっても、口の悪さは相変わらずである。
「アツシ、金髪美人好きでしょ。ベッドの下見ちゃった。意外と大胆な趣味だね」
「あさったの？僕が寝てる間に。あれは海外旅行に行った友達がお土産にくれて」
「そして大切にとってある…と」
　僕ぐらいの年の男は、みんなこんなもんだよ、それに金髪が好きなわけじゃない、と弁解するように言ったアツシがかわいかった。
　オムライスを食べながら、トモコの話をした。一番の親友であること。それから、この前トモコに言われた「清川さんは甘えている」発言と、私がアツシに依存していることを指摘された件について。アツシは、いい友達だね、と言ってくれた。厳しいことを言ってくれる友達こそ、いい友達だと。
　トモコがいなかったら、今の私とアツシはいない。今度、トモコを紹介したいんだけど。とアツシに打診した。まだ知らない人と会うのは無理かな。しかも、結構きついことを言う友達だし。そんなことを思っていたら、アツシは、
「今度、一緒に遊びに来たらいい」
と言ってくれた。
　アツシが変わろうとしている。人とかかわろうとしている。それがうれしかった。

## ９　アツシとトモコ

　トモコにアツシとの事の顛末を話すと、清川さんもやるな…、いい男っていうのは口説き方もわかっているというか、さまになってさりげないというか、自信を持つと強いねと笑った。
　アツシの告白は、好きだとか言ってくれたわけじゃないけれど、恋愛経験値の低い私をときめかせるには十分だった。
　トモコは、よかったねと言ってくれた。
「今度、一緒に遊びにおいでって言っていたけど、どうする？」
「もちろん、いくよ！清川さんの都合は、どうなのかな」
「まぁ、いつも暇そうだけど。今はむしろトモコの方が忙しいよね。こっちはいくらでも合わせられるよ」
「今度の日曜の午前は部活だから、午後とかどう」
「わかった。そう伝えておくね。くれぐれも言っておくけど、口が悪いから」
トモコは、わかったわかったと笑った。
　日曜の午後、トモコと一緒に清川邸を訪れた。
「こんにちは」
「いらっしゃい。どうぞ」
　外面のいいアツシは、猫を被っているようだ。とりあえず、トモコの前で「バカジョ」連発だけは阻止しなければならない。
「コーヒーと、紅茶とどっちにする？」
「紅茶？ネットで買ったの？」
「普通のお店で買ったって。パックで悪いけど。それと一応ケーキも。コンビニので悪いね」
　アツシが照れくさそうに言った。
「一人で行ったの？」
「僕もやればできるでしょ。トモコちゃんが来るっていうから、一つくらいいいところを見せようと思って」
　一人で行ったんだ。外に出られるようになったんだ。自分のことのようにうれしかった。
　敬意を評して、紅茶とケーキの用意は、トモコと私でやった。
「清川アツシです。ツカサが最初に僕に手を振った日、一緒にいた子だろ？こうやって話すのは初めてだよね」
「あ、覚えていてくれたんですか。菊池トモコです。いつもツカサに仲良くしてもらっています」
「僕が甘えてるって指摘してくれてありがとう。実際今でもそうなんだ。でも、少しずつ変わろうと思っているから、しばらく大目に見てほしい」
「私こそ、何も知らないのに。でもちょっと安心しました。本当に甘ちゃんだったら、ツカサと別れてもらうつもりだったから」
　半分冗談だ。それがわからない、私やアツシではない。
　トモコは、定期演奏会のことを話した。二部形式で、二部はポップスステージだから、みんな

が楽しめる曲ばかりだと教えてくれた。一部のステージにはのれないけれど、二部は自分も参加するから、是非見に来てほしいと、言った。アツシがチケットのことを聞くと、無料であることと、始まる時間を教えてくれた。ホールは少し遠いが、昼開演なので、交通機関を使えば何とかなりそうだ。
「座席はどうなんだろう。僕みたいなのでも大丈夫かな。車いすは離れた所に置くことになるんだろうか」
「以前使ったことがあるホールなんだけど、車いすの人用の席があるから、心配しないで」
「それじゃ、ツカサと聴きに行くよ。コンサートとか、本当に久しぶり」
「クラシックとか聴くの？」
「いや、音楽の授業以外で聴いたことないけどさ」
　あっさりとアツシが認めたので、トモコは笑った。
「吹奏楽は、クラシックとはまた違うから。別の楽しみ方ができると思う」
　帰り際に、アツシが何か思いだしたようだった。
「菊池トモコちゃん…だよね。もしかして、翔北に行っていたお兄さんいないかな」
　翔北というのは、この地区で有数のスポーツ特待生が通う高校である。
「菊池リョウジ。知らない？」
「兄を知っているんですか？」
「うん。陸上やってたでしょ。元気にしてるかな」
　トモコの顔が少し曇った気がした。気がしただけかもしれない。トモコは笑顔に戻って、「元気ですよ」と言った。
　トモコが帰った後、アツシは大きくため息をついた。
「疲れた？」
「いや、最後の最後でまずったな…と。トモコちゃん、兄貴のことには触れられたくないみたいだった」
「そうかな。確かに、トモコから家族の話は聞いたことなかったかも」
　アツシは、トモコのお兄さんのことも、陸上のことも話さなかった。

## １０　変化

　清川邸に通う日は続いたけれど、季節が冬に近づくたびに、一緒にいられる時間は少なくなった。暗くなるのが早いから、その分早く帰らされたのだ。それは少し寂しかった。
　その分休日にデートした。駅方面に行くことが圧倒的に多かった。駅の身障者用トイレは、次に行ったときには直っていた。
　アツシと歩いていると、あからさまにじろじろ見られることもあった。ひどい時には、邪魔だと言われることもあった。私もアツシも強くならなければならなかった。
　そうそう、アツシは新しい車いすをネットで購入した。真っ赤な車いす。購入のポイントは、軽量であること、強い素材であること、タイヤがパンクしないことだった。
「重量は１２キロ」
「そんなに重いの？」
「これでも軽い方だよ」
　せっかく軽いのを見つけたのに、私が重いと言ったものだから、少し不満げな顔をした。
「でも、パンクしないタイヤって、ちょっと変な道だと抵抗があるんだよね。なかなか難しい」
　一つクリアされても、新たな問題が出てくる。最良のものを選ぶのは難しい。
「そうだ。来週から、しばらく休日にツカサと会えなくなるから」
　今度は私が文句を言う番だった。
「ただでさえ、冬が近づいて夕方会えなくなっちゃったのに、この上休みも会えなかったら、一体いつデートするの？アツシは自分で動けるようになったから、一人で遊びたいんだ」
「そういうわけじゃないけどね。休日はちょっと用ができたんだ。ツカサに早起きする根性があれば、朝来てもいいよ。僕は六時に起きるようにしているから」
「わかった」
　かくして、清川邸への早朝訪問が始まった。
　お母さんには、学校で早朝勉強会が始まったと嘘をついて、毎朝六時に家を出た。
　ひきこもりから脱したアツシは、規則正しい生活をしているようだった。ゴウンゴウンと洗濯機の回るような音がする。
「洗濯、自分でするようになったの？」
「スイッチ入れるぐらい、できるからね。干すのはまだ無理だけど、そのうち何とか考える。食事を作るのも唐沢さんとやってる。唐沢さんは、例のお手伝いさん」
　全く接点のなかったお手伝いさんと、話すようになったんだ。すごい成長ぶりである。
「今は、自分で自分のことをできるようにしたいからね。ほかにも目標ができた。例えばツカサと普通のデートをすることとかね」
「今だって、普通じゃん」
「行動範囲がコンビニと駅前っていうのは普通とは言わない。歩いていると、時々文句も言われるし」
「それは、世の中の人が冷たいからで」
「急いでいるときに、もたついている人がいたらイライラするのは当たり前。ツカサ、批判的に

なりすぎだよ。それに、登山と海水浴は無理かもしれないけど、旅行には行きたい」
　旅行…か。アツシと。二人で。
「その前に、１１月末のワカ女吹奏楽部定期演奏会。計画を立ててみた」
　アツシがインターネットの画面を出す。バスの路線図、バスの時間をひとつひとつ説明してくれた。まず、駅に出て、そこからバスに乗る。乗り換えはなし。かもめホール前で下車。バスの乗車時間は二十分。一時間に一本のバスだから注意すること、込むかもしれないから、通常より一本早いバスで行くことを提案した。
　それからアツシは、別のソフトを立ち上げた。
「グーグルアース。知ってる？」
　得意げにかもめホール周辺の立体地図を見せてくれる。
「テクノロジーはすごいね。僕が作ったわけじゃないけど」
　例えば、コンピュータプログラミングの仕事なら在宅でもできるかもしれないな、アツシは漠然と言った。将来のことを考えて、少しずつ前進しているようだった。将来か。私は一体何になるんだろう。

## １１　定期演奏会

　定期演奏会当日。アツシの計画は順調だった。駅までの道はもう慣れているから、問題なかった。ファーストフード店でハンバーガーを食べ、一本早いバスに乗った。もちろんバスはすいていた。バスはステップバスで、車いすのままでも乗ることができたし、運転手さんも手伝ってくれた。
　問題は、かもめホール前で降りてからだった。交通量が多いため、横断歩道はなく、地下道があった。地下道へは階段と、その横にスロープが設置されていた。そこまでは良かった。
「ちょっと、誰がこんな急な坂、下りたり上がったりできると思ってんのよ」
　思わず文句を言いたくなるくらいの、急で、狭いスロープ。
「ツカサ、手伝ってもらえる？」
「手伝うけど」
　アツシの手動ブレーキと、私の呼吸を一苦労で合わせて、ようやく地下に入った。地下道はもちろんアツシが操作した。でも下ったということは、恐怖の上りがあるということだ。
「あー、もう。絶対これ、市役所に言ってやる。意味ないって言ってやる」
　急に手元が軽くなった。
「大変だろ、手伝うよ」
　低音の男性の声だった。
「すみません。助かります」
　男性はそれには何も言わず、ぐいぐいとアツシの車いすを押してくれた。男の人の力にはかなわない。悔しいけれど、助かった。
　地上に出た。気持ちがいい風。カビ臭い地下道とは大違いだ。
「助かりました。ありがとうございました」
　アツシが言うと、男性は、はにかんだように笑った。この人、誰かに似ている。
「久しぶりだな、清川」
「リョウジ」
　その人は、トモコのお兄さんだった。妹の忘れものを届けに来た、とリョウジさんは言った。
「ちょっと待ってろ、楽屋に届けてくる。まだ開場まで時間があるから、ホール内の喫茶店にでも入ろうや」
　そう、リョウジさんは提案した。
「アツシ、私は席をはずしていた方がいいかな」
「どうして？」
「積もる話もあるでしょうし」
「いいよいいよ。リョウジもそんなこと気にする奴じゃない」
　友達？と聞くと、笑って、犬猿の仲と教えてくれた。
　リョウジさんと、アツシと、私。三人で喫茶店に入った。
「トモコの友達の村山ツカサです」
「僕の彼女」

　すかさずアツシが言った。恥ずかしい。言わなくていいのに。今はそんなこと関係ないのに。
「そういう体でも、いい男っていうのはもてるんだな」
　その言い方に少しカチンときた。「そういう体」って言い方はないんじゃないの。でも、アツシが久しぶりに会った人だし、トモコのお兄さんだからと思って、何も言わなかった。
　注文をウエイトレスが聞きに来て、私はオレンジジュース、男性陣はコーヒーを頼んだ。
「ツカサちゃん、こいつは西南のやり逃げ男で有名だったから、気をつけた方がいいよ」
　な…。何ということを。アツシを見ると、目を逸らされた。自覚があるらしい。
「もっとも、その足じゃ、もう逃げられないか」
　まただ。
「人よりいい頭と、いい顔を持っていても、二度と跳べないんじゃ、みじめだな」
「ちょっと！」
　血が昇ったところをアツシに制された。そういう言い方はひどいんじゃないの、という言葉をなんとか飲み込む。
「何でもできると思っていた頃よりも、できないことが多い今の方が充実していて面白い」
　それは、アツシの負け惜しみかもしれないけれど、私は立派だと思った。リョウジさんの右手が小刻みに震えている。それを左手が抑えた。
「どうした？大丈夫か」
「何でもない。調子が悪いんだ」
「どこかで横になるか？」
　少しリョウジさんの顔が変わった。
「お前、そういうこと言うやつじゃなかったぞ。頭もぶつけたのか」
　ひどい言われように、アツシは笑って、リョウジさんに水をすすめた。時計を見ると、開場五分前を指していた。
「今度、ゆっくり僕の家に来ないか？場所はトモコちゃんが知ってる。退屈してるから、遊びに来てくれよ」
　思いついたように、アツシは携帯電話を取り出すと、「よかったら番号教えてくれよ」とリョウジさんに言った。リョウジさんは無言でそれに応じた。
　ホール内の、身障者席に私とアツシは行った。アツシは車いすのままでよかったし、パイプいすが置いてあったので、私はそれに座ることができた。
「寝たら、トモコちゃんに感想を言えないから、絶対寝るなよ」とアツシに念を押された。
　実際コンサートが始まると、寝ている暇はなかった。トモコが言っていた、クラシックと吹奏楽が違うということは、素人の私でもよくわかった。吹奏楽は眠い音楽ではなかった。
　それから二部のポップスステージは、期待を裏切らずに楽しめた。トモコは演奏するのかと思っていたら、楽器を吹いたのはほんの数曲で、あとは踊っていた。とにかくパフォーマンスがすごかった。
　しっとりしたディズニーのアンコール曲のあとは、派手なサンバで幕を閉じた。拍手が鳴りやまず、もう一曲演奏してくれないかなと思うほどだった。

　演奏が終わると、会場にアナウンスが流れ、ホール内が明るくなった。アツシに感想を求めようとしたら、じっと見つめられていた。
「吹奏楽っていいね」
　月並みのことしか言えない。
「トモコちゃんがやってることって、すごいことだな。こんな風に感動できるなんて。それに楽器を演奏できるってかっこいいよな」
　アツシもしみじみと言った。来年もまた来たいね、そうだな、そんな風に話した。

## １２　過去

　帰ってきてから、自然とリョウジさんの話になった。
「リョウジさん、ちょっと苦手だな。あんな風に言うことないのに」
「困っていたら手伝ってくれたよ」
「でも、アツシと話しているとき、めちゃくちゃ感じ悪かったよ」
「過去のことだけど、リョウジがひそかに思いを寄せていた相手とエッチしちゃったからね。根に持ってるんだろう」
「な！なんてことしたの！」
「後から知ったことだから仕方ないよね」
「まさか私ともやり逃げしようとか考えてないよね。バカジョは軽いからって理由で付き合ってないよね」
「さぁどうだろう」
　アツシはそう言ったけど、そんなつもりがないことぐらいわかっているつもりだ。過去はどうあれ、今は違う。だって、キスもしたことないし、抱きしめられたこともないんだから。今のアツシは、無駄に手が早くない。
「話しにくいことだったら無理しなくていいんだけど、そろそろ聞いておきたいことがある」
　私は、そう言ってアツシが歩けなくなった理由について聞いた。
　アツシは、淡々と、「自動車事故」と言った。お盆の墓参りで家族三人、父親の実家に帰省中、高速道路で多重衝突事故に巻き込まれて、両親は即死、アツシだけが生き残ったという。まるでドラマのような現実。
「盆や彼岸に亡くなる人っていうのは寿命なんだって。他人事みたいに親戚が言っているのを聞いたよ。そんなこと言われても、慰めになんかならないのにね」
　事故があったのは昨年のこと。つまり、大学一年の夏に不幸があり、それ以来、休学しているらしい。休学期間は最大で二年だから、そろそろ今後のことを考えないといけないと、アツシは言った。
「リョウジが、僕に敵意を持つ、もう一つのわけを教えてあげよう」
　いたずらっぽく、アツシは言った。車いすで移動し、階段の手前で止まると、車いすから降りた。
「ちょっと不格好だけど、笑わないように」
　釘をさしてから、腕の力を使って、這うように階段を上っていく。とても笑う気にはなれなかった。
　初めて入る、二階の部屋。アツシが、いつも外を眺めていた部屋。「入って」と促されて足を踏み入れると、棚にびっしり、トロフィーと楯が並んでいた。壁には賞状がかかっている。「男子走り高跳び　第一位　清川アツシ殿」その記録が、どれだけすごいのかはわからなかった。
「僕の母が、まとめてくれてたの」
　そう言って、スクラップブックを手渡された。中には、新聞と雑誌の切り抜き。それは、中学生の時から始まり、大学１年の７月の大会で終わっていた。

　跳ぶ前のアツシ。まさに跳んだ瞬間。バーを振り返るアツシ。笑った顔、悔しそうな顔、両脚でしっかりと立っているアツシ。どれも私の知らない顔だった。アツシは、そのすべてを失った。
「あ、これこれ」
　笑って、指差された記事を見ると、「第二位　菊池リョウジ」の文字があった。いいライバルだったんだ、とアツシは言った。
「以上。これが僕の過去の栄光です」
　ふざけたように言って、壁にもたれかかった。
「この部屋から、頭を下にして飛び降りたら死ねるかなって、ずっと考えてた。バカジョの女の子を見ていたわけじゃなかったんだ。リョウジの言った通り、人よりいい頭、いい顔を持っていても、跳べなかったら意味がない」
　私はアツシを抱きしめた。
「僕は、頭も顔もどうでもよかった。バカみたいに、何も考えずに、跳べればそれでよかった」
　アツシが私の髪を撫でた。
　私は、そんなアツシに、パラリンピックを目指したらなんて、無責任なことを言っていたんだ。自分のバカさを呪いたかった。
　アツシは、私から離れた。
「泣いているかと思った」
「泣かないよ、今さらこんなことで」
　ツカサ。
　何？アツシ。
　嫌だったら逃げて欲しいんだけど。
　うん。
　君にキスをしてもいいですか。
　キミニ　キスヲシテモ　イイデスカ。
　私が目をつぶると、アツシの柔らかい唇が私の唇と重なった。ためらいがちに、アツシの舌が私の口の中に入ってきて、舌の先端を少しだけつつくようにして、去っていった。
「こういう照れくさいキスは、小学生以来だ」
「小学生って。マセガキ！」
　私は、跳んでいるアツシを知らない。ヒーローだった頃の、何でもできるアツシを知らない。でも、今何かに挑戦しようとしている、かっこいいアツシを知っている。
　私は、これからもずっとアツシを見ていたいと思った。

## １３　トモコの秘密

　演奏会はどうだった？と、早速トモコに感想を聞かれた。音量に迫力があったこと、ちっとも眠くならなかったこと、二部のステージが楽しかったこと、踊っているトモコを心の中で応援したこと、アンコールでもう一曲やって欲しかったこと、を順に話した。
「満足してもらえたようでよかった。清川さんは、どうだったかな」
「トモコちゃんがやっていることはすごいって言っていたよ。感動したみたい。それから、身障者席のパイプ椅子もありがとう。おかげさまでアツシと一緒に楽しめた」
「あれはホールの人がしてくれることだから」
「それでも、うれしかった」
　リョウジさんに会ったと話すと、トモコが一瞬止まった。
「会場に行く途中で、地下道からあがるときに、坂が急すぎて大変だったの。リョウジさんが手伝って押してくれた」
「そう」
「アツシとリョウジさん、因縁の二人だったよ。アツシの奴、手が早くて、リョウジさんが好きだった女の子とっちゃったらしいんだよね」
「そう」
「アツシも高跳びやってたんだって。ライバルだったって言ってた」
「ごめん、ツカサ。兄貴の話は私の前でしないでもらえるかな」
　トモコはいつもの表情に戻ると、ごめんね、と言った。
　トモコの様子は、それからもずっと変だった。定期演奏会の後から、部活の話をしなくなった。
「トモコ、部活で何かあった？先輩とうまくいってないの？」
「そんなことないよ」
「でも最近変だよ。悩んでいるんなら、話して欲しい」
「何でもないから、放っておいて」
　語気が荒い。
「ツカサのそういうところ、うざいよ」
　トモコに言われるとこたえる。そういえば、以前アツシにも言われた。その時はどうしたっけ。
　それでも、関わろうとしたんだった。
「うざくて結構」
　私は、ここじゃなんだからと、トモコの手首をつかんだ。トモコが小さく悲鳴をあげて、顔をしかめる。
「ごめん」
　ブラウスをめくると、手首に青あざがあった。
「ごめん、トモコ。怪力で握っちゃった。楽器もてなくなっちゃったらどうしよう」
　トモコが泣き笑いの表情になった。

「鈍いな、ツカサは。ツカサじゃないよ。お兄ちゃんにやられたの」
　絶句した。
「ここだけじゃないの」
「それ、トモコの両親は知ってるの？」
「もう、お父さんもお母さんも手に負えない。うちは今めちゃくちゃで」
　どうしよう、どうしよう。想定外だ。私はどこまでトモコの力になれるんだろう。そもそも誰に相談していいかもわからない。家庭内暴力には違いないけれど、こういうのって中学生くらいのひきこもっている子がやるものだと思っていた。それなら児童相談所にいけばいい。でも、リョウジさんは大人だ。
「アツシなら、アツシならなんとかできるかもしれない。リョウジさんのことも知っているし、遊びに来いって言っていたし、それなりに親しいのかも」
　トモコは、巻き込んだら悪い、迷惑をかけるわけにはいかない、と言った。
「乗りかかった船。聞いちゃったんだもん、放っておけないよ。帰りに清川邸に行こう」
　このあと、私もアツシも大事件に巻き込まれることになる。

## １４　作戦

　トモコの話は、思ったよりずっと深刻だった。リョウジさんが、アルコール中毒で、毎日のように暴力をふるうようになったこと、特に定期演奏会が終わってから酷くなったことを話した。
「リョウジは、いつからそんな感じなの」
「今年の夏に、いきなり大学をやめて帰ってきて、その時にはもう飲まないと正気でいられないって」
「飲まないとって…飲んだらもっと駄目でしょうよ」
　アツシは呻った。携帯の番号を交換したけれど連絡をとっていないようだ。
「連絡取らなきゃ意味ないじゃん。まったく、遊びに来て欲しいとか言っておきながら、そうやって待つことしかしないんだから」
「だって、気まずいだろ。高校も違うし、僕はもう陸上もやっていないし、おまけにリョウジとはいろいろあったし」
「思い出話じゃなくて、これから仲良くなるように、遊びに行く話でもすればいいでしょ」
　言葉では、来てくれとか言っておきながら、携帯のメモリを埋めたかっただけじゃないのと毒つくと、アツシが私を睨んだ。それを見かねたトモコが、私とアツシの間に割って入る。
「清川さんだけにまかせるのは、どう考えても無理があるよ」
「嫌かもしれないけど、暴力とかって、警察に介入してもらうとかできないのかな」と、私。
「家庭の問題には、あまり踏み込んでこないんだよ」と、アツシ。
「とにかくお酒を抜かなくちゃいけないよね。禁酒ってどうするんだろ。うちの父親も禁酒はできないみたいだけど」
　のんきに言った私に、トモコは、ため息をついた。
「もう、禁酒とか、自分で何とかできるレベルじゃないんだと思う。依存症、病気」
　アツシが、病院か、何科になるんだ？肝臓が悪くなるから、内科なのかな？と言った。トモコも私も見当がつかない。アツシも頼りにならない。ふと、アツシが何も言わず部屋から出て行き、少しして、膝の上にノートパソコンをのせて帰ってきた。
　キーワード　アルコール依存症　治療
　投薬治療や、入院、自助会、いろいろな説明がある。三人で読んでいてわかったのは、アルコール依存症は脳の病気であり、気合いだけではどうにもならないということだった。アツシは、何気なく「アルコールセンター」のページをクリックした。
「ねぇ、ここいいんじゃない？」
　三人の声が一緒になった。
　アツシが、アルコールセンターに直接問い合わせて、情報を集めてくれることになった。私とトモコは、リョウジさんを一度アツシと会ってもらうように説得することを引き受けた。
　トモコの家に来るのは、初めてだった。いたって普通の一軒家。リョウジさんはいるのだろうか。奥の方からトモコの、また飲んでるの？という声が聞こえてきたので、私は気持ちを引き締めた。
　トモコが温かいお茶を持ってきてくれた。少ししてリョウジさんが奥から出てきた。酒臭い。

「ツカサちゃんだっけ」
「こんにちは。あの、今日はお願いがあってきました」
　リョウジさんが、何？と言って、マグカップに入ったお茶を飲む。
「アツシに会ってもらえませんか。リョウジさんに全然連絡をしてませんよね」
　リョウジさんは、そうだな、と言った。
「アツシはプライドも高いし、あんな性格だから、高校の同級生とも連絡をとっていなくて。最近はだいぶましになったんですけど、半分ひきこもりなんです」
　あいつらしくないな、とリョウジさんは言った。トモコから聞いた話だと、リョウジさんは、もともと面倒見のいい人らしい。
「俺はどうしたらいい？」
「来週の日曜、アツシと会ってもらえませんか？これ、アツシの家の地図です」
　リョウジさんは、地図を見た。ワカ女通りに面しているんだ、そう口に出した。
「わかった」
　私は心の中で一息ついた。離れた場所に座っていたトモコも、明らかにほっとした顔をしていた。あとは、アツシの腕にかかっている。

## １５　事件

　日曜日。私とトモコは、ひと足早く清川邸に来ていた。
「清川さん、すみません。お願いします」
　アツシは、胸を張って、まかせて、と言った。それから、自分がいいと言うまでは、顔を出さないようにと念を押した。私とトモコは、アツシの部屋で待つことにした。
　インターホンが鳴る音がして、アツシが玄関に出て行く気配がした。落ち着かないね。とトモコと顔を見合わせた。それはとても長い時間だった。
「大学の新歓コンパで飲まされたらしくて。それから、お酒を飲むようになったって。記録が思うように伸びなくて、そのたび飲んでたみたい」
　記録が伸びないということは、ストレスなんだろうか。でも、スポーツをするということは、自分の体調を管理しなければいけないということだ。悪い友達に引っかかっちゃったんだよね、きっと、とトモコは言った。
　怪我をして、訪ねてくる友達もいないで孤独だったアツシ。友達はいたけれど、お酒の道に引き込まれてしまったリョウジさん。どちらも不幸だ。友達って難しい。私は、トモコを見た。トモコとは、ずっといい友達でいたい。恥ずかしくてそんなことは言えないけれど、そう思った。
　響くような音がした。
　トモコの顔色が変わった。
　私は、トモコより先に駆け出した。
　リビングでは、リョウジさんがアツシに馬乗りになっていた。
「お兄ちゃん！」
　トモコが叫んで、リョウジさんが振り返る。
「てめえら、最初っから俺を病院に入れるつもりだったんだな！俺は、どこも悪くねぇ」
「リョウジ、お前は病気だ！病気なんだよ！トモコちゃんのことも傷つけてるじゃないか」
「だまれ！」
　鈍い音がした。アツシが殴られた音。
　私は無我夢中で、リョウジさんに殴りかかった。人を殴ったことなんて、この年までない。私の拳は、空を切った。リョウジさんが体を起して、私に殴りかかってくる。
　まずい。
　アツシが、リョウジさんの足に絡みついてくれたおかげで、なんとか離れることができた。リョウジさんが、足を振り上げる、アツシがくらいつく。私が勢いをつけて、リョウジさんにタックルする。リョウジさんともつれるように、床に転がる。
　遠くで、パトカーのサイレンが聞こえた。
「警察、呼んだから」
　トモコが冷静に言った。
「ごめん、最初からこうするべきだった」
　リョウジさんが床に座り込んだ。
　床に転んだときにぶつけた肘が、少し痛みだした。アツシは…。駆け寄ると、息を切らして

いた。
「運動不足、だね」
　リョウジさんが、口元だけで笑った。リョウジさんの顔も腫れていたから、一発くらいアツシがお見舞いしたのかもしれない。アツシの顔は、口元が切れていた。
「いい男、台無し、だろ？」
　アツシに同意を求められて、泣きたくなって、「自分で言うなバカ」と悪態をついた。
　冷凍庫から氷を出して、ビニール袋に入れると、リョウジさんとアツシに手渡した。それから、トモコの手を握った。震えていた。
「大丈夫だから。泣かないで。目が腫れちゃうよ」
　声をかけたら、トモコは激しく泣いた。
　まもなく、警察官が入ってきた。当事者の私たち四人は、別々のパトカーに乗った。
　警察署では、事情聴取と言うのが待っていた。リョウジさんがアツシに暴力をふるったところを見たわけでもないし、リョウジさんに怪我を負わされたわけでもないので、肘が痛いことは黙っておいた。私の聴取はほとんど時間がかからなかった。
　部屋を出ると、廊下でトモコが待っていた。横には、トモコの両親、私の両親が座っていた。私の顔を見たお父さんが、駆け寄ってくると、私の頬をたたいた。中学生の反抗期以来だ。
「子供だけで解決できる問題じゃないだろう」
　私は、ごめんなさい、と謝った。トモコの両親にも、軽率でごめんなさいと謝った。
「トモコ、リョウジさんとアツシは」
「二人は当事者だから、まだかかると思う」
　本当は、この場で待っていたい気持ちでいっぱいだった。でも、トモコの両親と、私の両親がそれを許してくれるとは思えなかった。
「今日は帰るね。また明日学校で」
　トモコは、ありがとう、と言った。
　お父さんも、お母さんも、それ以上は怒らなかった。お風呂上がりに、お母さんが肘に湿布を貼ってくれた。
「トモコちゃん、これから大変かもしれないから、今まで通り仲良くしてあげなさい」
　お母さんにそう言われて、ようやくほっとして涙が出た。
「それから、清川さんとどういう関係か知らないけれど、ちゃんとしなさいね」
　はっきりと釘を刺された。

## １６　紹介

　トモコの話では、二人はこってりと絞られたそうだ。ただ、リョウジさんがお酒を飲んで酔っていたこともあって、酔っ払いの喧嘩としてことを治め、二人ともそれ以上話を大きくしなかったようだ。警察官に絞られたのは、喧嘩ぐらいで警察を呼ぶなと言うことだった。
　リョウジさんのことは、家族で話し合って、一度近くの病院に相談に行くこと、治療を受けて合わなかったら、アツシの調べたアルコールセンターに入所することを決めたそうだ。
　トモコは、もう一度謝った。私は、その話はもうしないようにしようと、トモコに言った。せっかく高校に入ってできた友達と、こんなことで気まずくなりたくないから。トモコは、はにかんだように、これからもよろしくと言った。
　アツシの家には、帰りにトモコと一緒に少しだけ顔を出した。顔は少しだけ腫れていた。トモコが謝ると、アツシも、せっかくトモコちゃんと仲良くなったのに、こんなことで気まずくなりたくないから、気にしないで、と言った。
「それに、喧嘩両成敗でしょ。僕もリョウジのこと殴ったんだから、おあいこということで。リョウジにもまた会いたいし」
　トモコはお礼を言った。
「それより、今回のことで、アツシのことがうちの両親にそれとなくばれちゃって」
「わかった。一度挨拶に行くよ」
　少し緊張した面持ちで、アツシが言った。
「ごめん、それの方が問題だよね」
　トモコがもう一度謝った。アツシが、「本当はもっと早くちゃんとしておかなきゃいけなかったんだから、それこそ気にしないでよ」と言った。
　なるべく早い方がいいと、学校が休みの土曜日にアツシを両親に紹介することになった。
　アツシの車いすを押して、私の家に向かう。緩やかな上り坂を足取り重く歩く。季節は師走。風も冷たい。
「小さな家だから」
「うん、わかった。お父さんはどんな人？」
「工務店で働く大工さん。昔堅気」
「早速、手強そうだ。お母さんは？」
「父と同じ工務店で事務をしてる。やさしいよ」
「ツカサは、一人っ子なの？」
「弟がいる。今日は部活でいないから」
　家に着いてしまった。玄関に入るまでに十センチ位の段差。
「ごめん、ここからは私がおんぶするから」
　私は、アツシを背負って、玄関のドアを開け、アツシを玄関の床に下ろした。
「ごめんください」
　出てきたのはお母さん。
「こんにちは。はじめまして」

　お母さんは、明らかにアツシの足の不自由さに驚いている。アツシは、気を悪くしていないだろうか。
「どうぞ、上がってください」
「おじゃします」
　アツシは、這うように廊下を進んだ。この家で車いすを使えたら、と思う。でも、床に傷がつくことを、きっとお父さんは嫌がるだろう。初対面なのに、さすがにそこまで要求することはできない。
　通された部屋は座敷だ。せめてダイニングやリビングなら、ソファやいすがあったのに。
　お父さんは、正面に座っていた。
「はじめまして。清川アツシです」
「ツカサの父です」
　それだけか！と思わず突っ込みたくなった。明らかにアツシを値踏みするような目で見ている。失礼極まりない。
「僕は、この通り、足が動きません。失礼ですが、伸ばしたままでも構いませんか」
「かまわんよ」
　アツシが座布団に座り、畳に両手をついて上半身を支えた。
「お父さん、ここじゃなくてリビングに移動してもらったらどうかな」
「ツカサ、初対面のお客さんをそんな所に通すつもりか」
　意地悪としか思えない。私はお父さんを睨んだ。お父さんは、素知らぬ顔である。少ししてお母さんがお茶とお菓子を持ってきてくれた。それから、お父さんの隣に座った。
「先日は、ツカサさんを警察沙汰に巻き込んでしまって、すみませんでした」
「もう勘弁してほしいね。あんた、自分の無責任さがわかっているか。トモコちゃんのお兄さんを加害者にするところだったんだ。あんたは、体が不自由で弱い立場にある。自分ばかり被害者だと思っているかもしれないが、加害者もある意味被害者であるということを忘れないでもらいたい」
「はい。申し訳ありませんでした」
「それから、ツカサのことも、もう連れまわさないでもらいたい」
「それは、僕の体が原因でしょうか」
「それ以外に何がある。清川さんとこは、資産家だっていうのは知ってるよ。でもね、金なんて紙切れ、今後どうなるかわからん。あんた、これからその体でどうやって働いていくつもりなんだ」
「大学に復学して、就職しようと思っています」
「その体は、ハンデだと思うけどね。例えば、こんな座敷で正座もできない。人に頼みごとをするには不向きだろう」
「お父さん、そういう言い方ってないでしょ」
　アツシが私を目で制した。
「それだけじゃない。地震、火事、万一の災害があった時、あんたはツカサと走って逃げられる

のか」
「僕の足で逃げることは無理です。でも、ツカサさんを庇うことはできます。僕の命に代えてでも守ります」
　アツシにここまで言わせてしまった。
「ここまで言ってくれてんのよ。許してくれてもいいじゃない」
　お父さんは、笑った。
「おい、若造。俺はな、あんたに死ねって言ってるんじゃないんだよ」
「じゃ、どうしろって言うんだよ」
　まずい、アツシが切れた。
「自分の頭で考えろ。それから、ツカサ。お前は、一生こいつのおもりをするつもりなのか。少しは、進路のこと考えてるのか」
　それは、もう考えてある。以前の、いい男と結婚して、子供は二人、の私ではない。
「福祉系の専門学校に行って、資格を取ろうと思う。ほら、今、介護職って、引く手あまたっていうし、私の頭でも就職先は困らないと思うし」
「お年寄りをなめんな。そんな気持ちで働かれてありがたいと思うか」
　くそう。私の夢をことごとく。
「うちに来るのに、ツカサの手を借りなきゃ来られないような奴との付き合いを認めるわけにはいかない」
　アツシは、すごく悔しそうな顔をした。それから、失礼しました、今日は帰ります、と言った。お母さんが出してくれたお茶は、ただ冷めただけだった。この辺で一番おいしいと評判のお菓子も手付かずだった。
「アツシを、送ってくる」と言うと、お父さんが嫌みたっぷりに、「そうだな。一人で来られないやつは、一人では帰れないな」とアツシに聞こえるように言った。アツシは歯を食いしばった。
　アツシは、言葉少なだった。
「ごめん。お父さんがあんな酷いこと言うなんて。もうちょっと物分かりがいいと思っていたのに」
　アツシは、「強敵だ」と言った。目頭を押さえたので、泣いてしまうかと思った。
「泣きたい？誰もいないし、泣いてもいいよ」
「こんなことじゃ泣かない」
　そう言って、私の顔を見た。「こういうのを完敗って言うんだろうな」、そう言って笑う。
「悔しいな。お父さんの言うことはもっともだ。何も反論できなかった。それに、ツカサは、毎日、学校と正反対の僕の家まで来てくれていたのに、今の僕じゃ、ツカサの家に行くこともできないんだよな」
「言っとくけど、私、アツシと別れたくないからね。こんなことで」
「でも、許してもらえるまでは、しばらく会うのをやめよう」
「そんなこと言って、いつ許してもらえるの？今から、うちまでの坂道を上る筋力をつけるのに、何カ月かけるの？せっかく、あと３週間でクリスマスなんだよ」

　アツシは、ごめん、とだけ言った。責めたかったわけじゃない。アツシは、それ以上何も言わなかった。

## １７　自動車免許

　独り身は、寒い。せっかく二人で過ごすはずだったクリスマスも一人。寒い。今年は、家でケーキなんか食べたくなかった。チキンだってどうでもよかった。アツシと一緒に過ごしたかった。
　恨みがましく、お父さんを睨む。
「あの若造に、こだわることないだろう」
　お酒を飲みながら、お父さんは言った。
「でも、きれいな顔をした子だったわよね。アツシ君」
「芸人じゃないんだから、顔なんてどうでもいいんだ。若いうちは、惚れただの何だのでいいが、年をとって困るのはツカサなんだぞ」
　それはわかっている。どこに行くにもアツシと一緒というわけにはいかない。でも、アツシを一人にするには、この世の中のシステムはあまりにも冷たいのだ。駅のトイレ、ファーストフード、美容院の階段、狭くて急なスロープ。こういうのをなんとかする職業ってないんだろうか。アツシが一人でも外出できるように。
　土地開発、都市設計。でも、一部に携わるだけじゃダメなんだ。家を建て替えるような小さな仕事じゃ駄目だ。それに、福祉のこともっと勉強しなければ。アツシが暮らしやすくなるように、世の中のシステムを変える。漠然と、それが私の夢になっていた。
　お正月になった。一体、アツシはいつまで待たせるつもりなんだろう。いつになったら連絡をくれるんだろう。
　元旦、お父さんは、お酒を飲んで横になっている。アツシと初詣にも行けない。もっとも、込んだ参道を歩くのも、石段を上るのも無理がある。
「買い物に行きたいわ。せっかくお正月なんだし」
　お母さんがぼやいた。
「行ってくればいいじゃないか」
「荷物が多くなると、持つのが大変だから、車を出して欲しかったのに。朝から飲んでいるんだから」
「それは買うなってことだな」
　お父さんはそう言って、盃に口をつけた。
　携帯が鳴る。アツシからだ。
“もしもし。明けましておめでとう”
「おめでとう」
　私は、場所を変えた。
“今日、お父さんとお母さんはいる？”
「いるけど。お父さん、少し飲んでるよ」
“元旦早々、挨拶に行っても失礼じゃないだろうか”
「ちょっと待って、聞いてみる。かけ直すね」
　私は、電話を切って、お父さんとお母さんに声をかけた。

「アツシが挨拶に来たいっていうんだけど、失礼じゃないですか、って」
「はぁ？」
　お父さんが間の抜けた声を出した。お母さんが、「お節もあるし、お客様用のお菓子もあるから、来てもらってもかまわない」と言った。
「お父さん、いい？来てもらっても。アツシ、一人暮らしでお節とか食べていないと思うの。いいよね」
「勝手にしろ」
　お母さんが、お座敷に暖房入れないとね、と立っていこうとすると、
「初対面でもないし、いつまでも客だと思われても困る、リビングに通しなさい」
と言った。「あいつ、床に座るのきついんだろ」とブツブツ言っている。私は、とてもうれしくなった。それからすぐに、アツシに電話をかけ直した。
　アツシは、間もなくやってきた。驚いたのは、乗用車で来たということだ。前と後ろに初心者マークが貼ってある。シルバーメタリックの乗用車。
　停めさせてもらうね、と何食わぬ顔で言って、うちの自家用車の隣に車を止めた。それから車いすを出すと、玄関までそれに乗った。
　驚いたと言うと、驚かせたかったと言った。玄関の手前で車いすを降りると、ここだけはどうしようもない、と言って、小さなシートを敷いて、その上を這った。
「ここまですることないよ」
「今日は僕の意地。僕たちのことを許してもらえたら、その後のことはまた考える」
　アツシが玄関に入ったところで、「こんにちは、おじゃまします」と言った。私はあわてて台所に行って、おしぼりを絞ると、玄関にいるアツシに渡した。アツシは、「ありがと、気がきくね」と言った。
「今日は、こっち」
　アツシをリビングに通す。テーブルの上には、お母さんがすでにお節を並べてくれてあった。
「明けましておめでとうございます」
「座りなさい」
　アツシは示されたソファに座った。
「どうやって来た」
「車で。免許をとりました。これで随分行動範囲が広がると思います。この家にも一人で来れます。それから、４月から大学に復学することを決めました。僕は、今まで経済を勉強していたのですが、もっと自分に密接な分野を勉強することにしました」
「で？」
「建築を勉強します」
　ちょっと、いくらうちのお父さんが大工だからって、それはないんじゃないの、と声を出そうとしたが、やめた。アツシなりに考えたことなのだ。
「火災、地震に強い住宅というのは、僕のような障害者だけでなく、高齢者の方が住む住宅、老人介護施設でも需要があると思います。僕のような立場の人間の視点だからこそ、わかることも

あると思います。ツカサさんとの付き合いを認めてください」
　お父さんは、お節の取り皿を、アツシに渡した。アツシがそれを受け取る。次に箸を、アツシに手渡す。アツシが無言で受け取る。お父さんが、盃をとり、アツシがそれにお酒を注ぐ。
「いいだろう。ツカサの帰りが遅くなったり、危ないことのないように、アツシ君、お願いします」
「はい、ありがとうございます」
　お父さんは、初めてその時アツシの名前を呼んだ。
「自分の家だと思って、くつろいでくれ」
　お母さんが、ジュースを持ってきた。
「車よね。あとで買い物に連れて行ってもらえないかな」
「はい、喜んで」
　ちゃっかりしている。
　その日は、最初から最後までなごやかなムードだった。お父さんは、お酒が入って始終機嫌が良かったし、お母さんも、アツシの食べっぷりがよかったのでうれしそうだった。
　車の免許をいつ取ったのかという話になった。どうやら、私と付き合い始めて少しした頃から、改造車を購入して、自動車学校に通っていたらしい。土日になかなか会えなくなったのもそのためだった。車があれば、かもめホールに行くのに苦労することもなくなる。私の家にも余裕で来れる。アツシは、ついに幽閉されていた塔の中から、地上に降りたのだ。

## １８　正の連鎖

　リョウジさんは、病院への通院治療と並行して、「断酒会」というのに入ったのだそうだ。リョウジさんは、そのミーティングから帰ってくると、必ず、「もう飲まない」と言うらしい。とりあえず、トモコの話では、リョウジさんはその後お酒を飲むこともなく、家の手伝いをしたり、図書館に行ったりして、今後のことを考えているということだ。
　アツシからも、リョウジさんのことを聞くことがある。電話をして、ドライブに行っているようだ。どこに行っているのかということは教えてくれないので、何かやましいことでもあるのかもしれない。
　アツシは復学の準備を着々と始めた。大学の先輩に問い合わせて、いらない教科書を送ってもらったり、友達に頼んで下宿先を探してもらっていると聞いた。実際、アツシの家に行くと、そのたびに建築関係、福祉関係の難しい本が増えていた。
　トモコは、「アンサンブルコンテスト」に向けて頑張っている。本大会の出場者は２年生で、トモコは本大会には出られないのだが、部内で開かれる２月初めのアンサンブルコンテストに向けて、同じ一年生と一緒に練習を頑張っているらしい。
　さて、私はというと。アツシと付き合ったことで成績が落ちてしまうと、お父さんに何を言われるかわからないので、アツシに勉強を教えてもらっている。あまりの私のバカさに、アツシもかなり手を焼いていて、
「僕、バイト代が欲しいくらいだ」
とよくぼやく。何と言っても、私は中学生の方程式の問題あたりからよくわからないのだ。
「専門学校なら、大丈夫かもしれないけど、ちょっと問題がありすぎだよ」とアツシはよく言う。このままでは、「アツシに優しいシステム」どころではない。恥ずかしいので、私もアツシにその夢のことは話していない。
　一番変わったのは、うちの両親だ。アツシが訪ねてくるのを楽しみにしている。アツシがうちに来るたびに、バリアフリー用のアイテムが増える。例えば、玄関の前の段差。お父さんが日曜大工で、工務店の余った材料を使って、緩やかな傾斜の台を設置してくれた。それから、トイレ。これも、廃材を持ってきて、手すりをつけた。アツシは、アイテムが増えるたびに大喜びした。お父さんもまんざらではない様子。
　私とアツシの関係は変わらない。部屋で二人きりになっても、甘い雰囲気になることはない。アツシのことをじっと見つめても、「ちょっと、真面目に聞いてる？」と怒られる始末。私としては、もう少し積極的になって欲しいと思ったりする。
　一度、アツシにドライブに連れて行ってもらった。高速道路に乗って、海を見に行って、海沿いのお店でラーメンを食べた。
　帰り道。高速道路の両脇に、西洋風のお城、いわゆるラブホテル街が見えて、「うーん、ラブホテルって、どうしてお城なんだろうね」
と思わず呟いてしまった。アツシが「どうしてだろう。みんな夢を見たいのかな。一体、今、あの建物の中で、どれくらいの男女が楽しんでいるのかなぁ」と妙に現実的なことを言ったので、私はかえって気分が醒めてしまった。

「ツカサちゃん僕らも休憩しようか」と意味深な台詞が聞こえた。
どうしよう、そんな準備できていない。
「次のサービスエリア。トイレ休憩」
アツシが私の反応を楽しむように笑った。

## １９　岐路

　二月の中旬。期末テストが終わった後で、アツシに正式に「復学」のことを報告された。三月の中旬に、大学のある都市に引っ越すこと、自分は家族がこの町にいるわけではないので、卒業までは戻ってくる意思がないこと、就職先によっては一生帰らないかもしれないことを私に告げた。
「それは、別れるってこと？」
　私は、本当に臆病になっていたと思う。アツシに拒絶されるのが怖かった。アツシが羽根を手に入れて、飛び立っていってしまうのが怖かった。
「ツカサが決めていい」
「別れたいわけないじゃん。アツシは、私のことなんてその程度なんだ。自分が絶対に手に入れたいって思っていないから、そういうこと平気で言えるんだよ。ずるいよ、そういうの」
「ツカサは高校生で、僕と離れていたら、いい男に声をかけられたりするかもしれない」
「バカにしないで。そんなに軽い女じゃない。アツシの方こそ、きれいな女子大生と付き合いたいんじゃないの」
「バカにするな」
　アツシもむっとして言った。私もむっとしていた。
「その程度って何だ。僕は僕なりにツカサのこと考えたんだ。その程度なんて言われたくない」
「好きなこととか、欲しいものとか、夢とか、相手の都合で簡単にあきらめんな」
　アツシは、私を引き寄せて抱きしめてくれた。私は、涙が止まらなくなってしまった。逆だ。私が涙を見せたから、アツシは抱きしめてくれたんだろう。アツシがいなくなってしまう寂しさ。私のことを考えてくれるうれしさ。よくわからなくなった。
「そんなに泣かなくても」
「泣いてない」
　アツシはため息をついて、私の髪を撫でてくれた。
「遠距離恋愛。頑張ろう」
　私は無言でうなずいた。

## ２０　障害者の性生活

　アツシは、来週この町を出て行ってしまうというのに、このまま何もないというのはいかがなものでしょうか。ここで離れたら、下手をすると、何年も何もないと思うのですが。彼女としての自信が欲しいのですが。アツシのものになってしまいたいと思うのですが。アツシ君とは、いい雰囲気になりません。どうしたらいいでしょうか。
　そんな悩みはトモコにしか打ち明けられない。
「こんなこと言ったら、アツシ引くかな。私がやりたいだけの軽い女だって思うかな」
「軽い女とは思わないんじゃない？少なくとも、ツカサが誰かと付き合うのは初めてって知ってるでしょ」
　初めてのキスの時に、それはわかってしまったはずだ。
「初めてってのは、緊張するし、怖いものだから、ツカサの気持ちはよくわかるよ。誘うとかおそれおおいよね」
「すごい、トモコ、先輩のようだ」
「だって、先輩だから」
　いつの間に、と思ったけれど、今は本題から外れるので聞かないでおく。
「どうしてそういう雰囲気にならないんだろう。アツシの家に二人きりってこともしょっちゅうだし、女に興味がないわけじゃないんだよ」
　トモコが、言いにくいんだけど、と前置きをした。
「怪我のせいで、できないってことはない？脊椎損傷で性機能に障害が残るっていう話を映画で見たことがある」
　考えられないことはない。できないから、私に触れないのかもしれない。だとしたら。私がそんなことを大胆に求めてしまったら、とても傷つけることになる。アツシは、もしもいい人がいたら、なんて言いだすかもしれない。遠距離になるってだけで遠慮するような奴なのだ。
　私は、トモコと情報センターに行った。パソコンの電源を入れ、インターネットソフトを立ち上げる。それから、いつもアツシがやっているみたいに、検索をかけることにした。
　キーワードは、「障害者　性生活」。
　その検索ワードから、たどったページを見て、随分とタブー視される問題であることがわかった。私自身、こういうキーワードで検索している時点で、障害者を馬鹿にしているのではないかと気が引けた。
　性欲があるのは普通である、と書かれていた。そりゃそうだ。人間だもの。私と変わらないんだ。
　私は、パソコンをシャットダウンした。
「アツシ、ああ見えて結構エッチな本隠し持ってるんだよ。どうせなら、私の裸を見て、目に焼き付けて欲しいよね」
　トモコが、私の名前を呼んだ。私の声が震えているのがばれちゃったか。
「できなくても、変わらない。私はアツシを否定しない」
　絶対に、否定しない。がっかりしない。離れない。自分の中で何度も唱えた。呪文のように。

アツシは、アツシだ。

## ２１　ラプンツェル

　清川邸のインターホンを押す。肩には、お泊まり道具の入ったカバン。トモコの家で宿題をすると嘘を言って、家を出てきた。
「今晩泊めて」
「え？」
「トモコの家に泊まるって言ってある。もうじき離れ離れになっちゃうから、今晩はアツシと一緒にいたい」
「そう。じゃ、ご飯を一緒に作ったり、深夜番組を見たりしようか」
　私はうなずいた。
　アツシの包丁を握る手は、さまになっていた。「もしかしたら、私よりも料理上手なんじゃないの？」と言ったら、照れていた。これなら大学生に戻って、一人暮らしをしても大丈夫だ。
　洗濯については、ドラム式の乾燥までできる洗濯機を買うだろう。掃除もきっとできる範囲でやる。慣れない場所で、戸惑うことも多いかもしれないけれど、時には手助けしてもらいながら、一人で暮らせるはずだ。
　二人でご飯を食べ、後片付けをして、バラエティ番組を見た。会話が途切れたら、一気に寂しくなりそうで、それが怖くて無理して笑った。
「ツカサ、今晩、僕のベッドで一緒に寝ようか」
　唐突にアツシが言った。そして、弁解するように、下心はない、一緒にいたいだけだから、キス以上のことはしないと言った。
「うん。朝までおしゃべりしよう。そろそろ、お風呂を貸してもらってもいい？」
　アツシが、バスルームに行って、準備をしてくれた。
「先に入っていいよ」
　お風呂は広々としていた。手すりが取り付けてある。アツシはいつもここで体を洗っているんだ。アツシの裸を想像する。男の人の裸なんて、腹の出たお父さんと幼かった弟のしか見たことがない。うまく想像できるはずもなかった。
　アツシが使っているシャンプーは、美容室「シエル」で勧めてくれたものだ。私も欲しかったんだよな。アツシが使っているシャンプーで髪を洗い、ボディソープで体を洗った。それからもう一度浴槽で十分に体を温めてから上がった。
「お風呂のお湯、ちょうど良かった？」
「うん。ありがとう」
「僕も入ってくる。部屋でくつろいでいてよ。退屈だったら、パソコンで遊んでいてもいいし」
　私と入れ違いで、アツシはバスルームに消えて行った。アツシの部屋に行って、本棚を見る。以前あった建築関係の本が消えていた。もう荷造りをしたのかもしれない。小説だけが残っていた。
　いたずら心で、ベッドの下に手を入れる。「やっぱりあった」
　以前の外人さんのヌード写真ではなかった。一体いつ新しいものを買ったんだ、どこで？という疑問はとりあえず置いておく。日本人がエッチなポーズをとっている。アツシは、こういうの

が好きなのかな。初めてとしてはレベルが高すぎる。そう思って、エロ本をベッドの下に戻した。
　アツシはすっきりした顔で、部屋に入ってきた。私と同じ匂いがした。同じシャンプー、ボディソープ。私は心を決めた。
「アツシ、見せたいものがあるの。ちょっとベッドに座ってくれる？」
　アツシは言われるまま、ベッドに座った。
「私が何か聞くまで、黙っていてね」
「わかった」
　私は、アツシから少し離れた場所で、湯ざめをしないようにと今まで羽織っておいたフリースを脱いだ。それから、パジャマを脱いだ。
「ツカサ、これはストリップショーと思えばいいのかな」
　のんきに冗談めかしてアツシが言った。
「黙って」
　アツシは黙った。
　私は、タンクトップを脱いだ。それから、緊張しながらブラジャーをとって、床に落とした。
「どう？」
　感想を求められたアツシは、私の目を見て、「肌の色が白いね。胸は大きくないけど、とてもきれいな形だと思う。素敵だ」と、言った。
「ありがと」
　私はぶっきらぼうに言った。緊張で口の中が乾いていて、声が裏返ってしまいそうだった。
　次に、パジャマのズボンを脱いだ。それから、今日のために買った少しだけ大人っぽいショーツを床に落とした。ブラジャーとおそろいの物だ。
「どう？」
「くびれがそそる。後ろを向いてくれる？」
　私は言われたとおりに、ゆっくりと後ろを向いて、アツシに背を向けた。
「おしりも、僕の好きな形だ。とてもきれいな体だと思う」
　そう言われて、私は振りかえってアツシの方を見た。
「ありがと。ちゃんと見ておいてね。ベッドの下の女の人ばかりじゃなくて、私の体も覚えておいて」
　アツシは、苦笑いした。
「しばらく会えなくなっちゃうから、どうしても私の裸を見ておいて欲しかった」
「見るだけで、終わりなのかな」
　アツシは真面目な口調で言った。私は唾を飲み込んだ。
「さわってもいいよ」
　アツシの隣に座ってアツシの目を見る。アツシは、自分で言ったくせに、なかなか私の体に触ろうとしなかった。私はアツシの手を自分の胸に重ねた。
「キスまでなら、良かったよね」

　ひとり言のようにアツシは呟くと、私と唇を重ねた。舌が口の中に割り込んできて、私の舌とからまる。そして私の口の中を探ったり、唇を甘噛みしたりする。頭の中がボーっとしてくる。もう、アツシのことしか考えられない。心臓がすごい勢いで打っている。
「ツカサ」
　アツシに名前を呼ばれるたびに、気持ちが高まる。私は幸せだ。これでいいんだ。もう何も望まない。
　アツシの唇が私から離れた。目が潤んでいた。
「ごめん、止まれそうもない。ツカサとセックスしたい」
　セックス。
　頭の中でアツシの言葉が反芻される。
「できるの？」
　つい大きな声が出てしまった。
　アツシが、少し照れくさそうに、「少し協力してもらうけど、いいかな」と言った。
「全然いい」
　私はどんな顔をしていたんだろう。アツシが笑った。もしかして、私がすごくやりたがっているように見えた？もしかして、淫乱だと思われた？初めてなのにそれは不本意だ。アツシにそれを言うと、セックスしたいのが僕だけじゃなくてうれしかった、と言った。
　アツシは、長袖シャツを脱ぐと、ジャージズボンをぐいぐいと押し下げるように脱いだ。それからトランクスを脱ごうと苦労した挙句、最高に照れた笑顔で、
「ごめん。これ、引っかかって脱げない。早速で悪いけど協力して」と言った。
　アツシが、両腕で体を支えて腰を浮かせ、私がアツシのトランクスを脱がせた。それがおかしくて、顔を見合わせて大笑いした。
　二人で笑いながらベッドになだれ込み、それは始まった。
　私は初めてだったから、やり方なんてわからなかった。他人から見たら、変なのかもしれないとも思った。でも、誰に見られているわけでもない。この部屋には、私とアツシしかいない。変でもかまわない。アツシが感じる顔を見て、私も今まで誰にも見せたことのない顔を見せる。秘密の行為は、私たちを何度も高まらせた。
　噂で聞いていたように、初めてはやっぱり痛かった。でもそれ以上に満足感が強かった。箸が落ちただけで笑う年頃、なんていうけれど、私たちもそれくらい若かった。
　私もアツシも本当によく笑った。アツシとの初めては、「楽しい」で終わった。それ以外なかった。「楽しい」ことが気持ちよくて、心地よかった。アツシが私にしてくれたことは、どうでもよかった。二人でしたことが気持ちよかった。アツシの乱れた顔を見たことや、私の乱れた顔を見せることができたのがうれしかった。
　パジャマを着て、アツシと一緒にベッドに入った。アツシが髪を撫でてくれた。実感を込めて、「随分と気持ちよかったです」と言ってくれたので、それが可笑しくて、また笑った。
「アツシは、足が動かないでしょ。セックスは一生無理なのかと思って。ごめん、聞けなかった」
「僕が傷つくんじゃないかと思って？」

　私がうなずくと、アツシは、ありがとう、と言った。
「ツカサとはまだ続ける自信があるから、楽しみは後に取っておいてもいいかなと思って」
「まさか、楽しみが終わったからってやり逃げしないよね」
　アツシは笑って、「ひどいな」と言った。
「あんまり手が早いと、幻滅されそうだから、僕なりに我慢していたのに」とむくれた顔は、年上には見えなかった。
「私、大学はアツシの大学と近いところに行くよ」
「僕と一緒の大学って言わないのがミソだね」
「だって、どう頑張ってもそこまで頭はよくなれないし。でも、福祉系の大学に行って勉強して、将来は公務員になろうと思う」
「公務員…。それは随分とお堅いな」
「アツシだけじゃなくて、障害のある人全員が楽しく外に出られるような、そんな町をつくるのが私の夢」
「成長したじゃない」
　アツシの目が次第にとろんとしてくる。
「まさか眠いとか言わないよね。せっかく朝まで一緒にいるんだから、もうちょっと話そうよ」
「そうだね」
　アツシはそう言ったけれど、睡魔に勝てなかったようで、すぐに規則正しい寝息を立て始めた。アツシの耳を引っ張ったり、頬をつねったりしたけれど、まったく気にした様子もなく寝息は続いていた。
「アツシ、頑張ろうね」
　私はそう言って、髪をさわると、目をつぶった。
　アツシは、予定通り三月中旬に、車に必要最小限の荷物を積み込み、清川邸から出て行った。清川邸は、アツシが大学を卒業するまでの間、空き家になる。定期的な掃除だけ、お手伝いさんに頼んだようだった。
　清川邸を出て行く朝、私はアツシを見送りに行った。
「僕も頑張るから、ツカサも頑張ってね。僕が留年したり、ツカサが浪人しなければ、僕が３年の時に、ツカサは１年生になる。そしたら、向こうで一緒に暮らそう」
「お父さん、許してくれるかなぁ」
「お互いにそれまで努力して認めてもらおう」
　私は、うなずいた。
「アツシ、グリム童話のラプンツェルの話、覚えてる？」
「王子が、姫を塔から連れ出す話だったっけ」
「本当はちょっと違うの。王子が姫に会いに、毎日姫の髪の毛を登って、とらわれた姫に会いに来る話。でもそれが魔女にばれちゃって、姫は塔を追われ、姫がいると思って塔を上った王子は魔女に目をつぶされて、森に捨てられて」
「ちょっと、それ、とても痛い話だね」
「でも、姫が王子を見つけて、キスをすると、王子の目が見えるようになって、それから二人は

楽しく暮らすんだよ」
「じゃ、僕らも最後はそうなるように」
　そう言って、私とアツシはキスをした。アツシは、「ツカサって意外とロマンチストだよね」と言った。そして、私たちは別れた。
　私が王子で、アツシがラプンツェルだったのか。私がラプンツェルで、アツシが王子だったのか、それはわからない。でも、私とアツシは、狭くて高い塔から、二人で逃げ出した。ハッピーエンドになるかはわからない。私たちの物語は、続いていく。

（了）

　私は高校二年に無事進級した。中くらいだった成績は、アツシが勉強を教えてくれたおかげで、クラスの上位になった。どうしても、四年制大学に進学したいという話を両親にしたら、塾に通うことを許可してくれた。
　アツシからは、定期的に手紙が届く。手紙というのが私たちの交際のポイントだ。私は、携帯のメールを主張したが、アツシは、自分はそんなにまめな人間でないので、頻繁に送られても返信できないと、はっきり言った。
「メールは、便利だけどね、漢字を忘れちゃうよ。いくら今の時代ワープロが主流と言っても、文字はきれいな方がいい。手紙なら、切手を買いに行ったり、ポストに出したり、僕のリハビリにもなる」
　アツシは真面目な顔で言ったものだ。私としては、手紙を書こうとするアツシの方がよほどマメだと思うのだが。

アツシへ
　元気ですか。大学への道のりで困ったことはありませんか。アツシの暮らす町は、暮らしやすいですか。とても心配です。
　私は、四月から塾に通っています。四年制の大学に行きたいことと、将来のことについて両親と話したら、許してくれました。私が勉強をしたいと言ったことなんて、かつてなかったので、二人は大喜びです。
　トモコは、７月にあるコンクールに向けて、頑張っています。新入部員の獲得に向け、勧誘活動も頑張っています。
　そろそろお風呂に入らなければならないので、今日はこの辺で。　ツカサ

ツカサへ
　元気です。大学へは車で行っています。駐車場は身障者用スペースがあるので大丈夫です。大学の場合、普通のお店などと違って、その辺は徹底しているので、過ごしやすいです。こちらでも、不便なところはあるけれど、その場所でいろいろな人に手助けしてもらっています。
　塾に行き始めたんだね。二年後、大学生になれるように、応援しています。頑張れ。
　トモコちゃんの演奏会、聞きに行けなくなっちゃったのが残念。ツカサと一緒に聴きに行った時の感動を思い出します。謝っておいてください。それから、リョウジのことも時々教えてくれると助かります。僕からも電話をします。
　ツカサがお風呂に入るというのを読んで、別の所が元気になってしまいました。本当にどうしようもないね。それではまた。
アツシ

追伸

「ラプンツェル」って、本当は性的な意味
の強い話なんだね。魔女が怒って、ラプンツェルを塔から追放したのも、王子が目をつぶされたのもわかる気がします。僕らは気をつけましょう。

　ホームページを印刷した紙が入っていた。私はそれを読んで赤面した。

## あとがき

　このたびは、「ラプンツェル」を読んでいただきありがとうございます。
　原稿用紙換算で、約１６０枚。私にしては珍しく長い作品になりました。最後まで読んでくださり、ありがとうございました。　青春小説であり、恋愛小説でもある、本作品。二人の成長と、恋のハッピーエンドをみなさんが感じ取ってくだされば、私としてもうれしいです。

　差別表現はないように心がけたつもりですが、作品の性質上、私が気付かないところで、不快な表現等があったかもしれません。教えてくださるとありがたいです。また、誤字、脱字の指摘や、感想等、いただけると幸いです。
　また、「ラプンツェル」は、グリム童話の中のお話です。興味がる方は読んでみてください。

　今後も、パブーで、無料作品を公開していくつもりです。よろしくお願いします。

２０１０年１１月２５日　澤村多門